主幹・麻生路郎

川柳雜誌

三月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和五年三月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌

第七卷 第三號

川柳雜誌社發行

三月例會

▼日時　三月六日(木曜)午後七時
▼場所　南區清水町電停西入北側　端の坊
▼兼題　「自殺」　三句
▼會費　三十錢
初心者の來會を大いに歡迎す

川柳雜誌社天王寺支部　創立句會

▼日時　三月十三日(木曜)午後七時
▼場所　天王寺區北河堀町　佛足寺
▼兼題　「内風呂」　五句
▼會費　錢
幹事　須崎豆秋

各地支部增設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を增設いたします。柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引き受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうさいふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌　第七卷第三號目次

感想・評論

柳界時評大空から　安井ひろし
竹馬居雜筆(二)　蛭子省二
灰色か　松丘町二
川柳塔の人々　出口雨町
松山より　岩本素人
難解の句　櫻井圓角

研究・其他

月評　卓を圍んで　路郎、紋太、山雨樓、ひろし、麻生路郎
冷刀を悼む　若井たけし
BUILDING　出口雨町
微と薄口　伊藤綠之助
初春のモノローグ　桑原京郎
時代の人々　正木柳建
あゝ柳人冷刀　平井蒼太
玄濤から　上田柳影
ほんの斷片的な　長已蘿楓
節分の思ひ出
猫の家出

一路集(募集句)

影　安井ひろし選
雀　太田朝陽選
家　住田亂耿
鴨　朝田新水共選
本社二月例會　丸山公二記
冷刀追悼句會　上田柳影記
各地柳壇

創作

川柳書架　出口雨町
杭全町MEMO　麻生路郎
編輯後記　住田亂耿
表紙題字　伊藤綠之助
近作川柳塔　長谷川一徹
水谷鮎美
岩崎柳路
酒井駒人
橋本綠雨
阿部閑生
松田多豆郎
須崎光秋
中村公二
丸山見市
西森公竹
池田雪峰
川村花菱
長崎柳秀
近作柳樽　麻生路郎
朝田新水
岩本素人
伊藤綠之助
伊藤愚陀
松岡町二
中島鐵洲
松盛琴人
橋本綠雨
路谷柴生
小出柴舟
櫻井圓角
植田湖舟
若井たけし
中澤濁水
松村敏郎
西杏三
安原京影
桑田柳
上田五健
前田正寺
木柳健家
諸

近作

麻生路郎

無産黨（二句）

金見たら一ト足逃げる面白さ

金は無くとも金は無くとも君と俺

鮎美君の新婚を祝して

ふたりふたり人ごみのなかでもふたり

葉平君一女を擧ぐ

眼も涼しかろ鼻もたかかろ女の子

悼冷刀

旅からのたより來さうに思はれる

近作柳樽

路郎選

行きましようよ行きましようよの子にひかれ　別府　晃卓
舞妓もう親の因果を語るなり　同　同
十圓やそこらの金に身をまかせ　同　同
旁々に來たゞ友達飲む氣なり　同　同
山火事の方を向いてる石地藏　神戸　九葉
うちの妓ゞ思へば戀も出來まへん　同　同
ぐるりから大人にされて坐りかへ　同　同
出養生葡萄の艶も親しまれ　同　同
押し返す時に何やら綻びる　東京　山門
嚴めしや貸して貰つた紙幣の角ゞ　同　同
息災で居りますゞ茶を熱く入れ　同　同
靄の向ふに子心が湧く　同　同
隣のゴミ箱の三越のレッテル　大阪　大夢子
皆歸つた殘る煮〆は冷たし　同　同
外は春だ笑ひたからう女店員　同　同
同じ鋏が切れる子ゞ切れない子　同　同
四十の眼にも椿の色は燃ねてゐる　松山　武子

悔み言うて心残りの後を向き　同
をごそかに結婚式の椅子を立ち　同
不似合ひな夫婦も虫の好きごころ　大阪　翠峯
見るからに夜のものなる毒婦なり　同
金遣ひ荒ふ恐れを感ぜしめ　同
女親系圖の前で眠くなり　高知　蝸牛
紅つけて今夜も男あざむかん　同
芋一駄賣つて訪ねん京の友　同

長女病む

藥石の力今年の間に合はず　大阪　雅幽
看護の疲れ一本つけてお元日　同
初日の出着のまゝなる母よ　同
病ひ故越してみる氣のいゝ空氣　松山　文芳
閑居とは見ゐても職を捜して居　同
是と言へば非と言ふ子なき夫婦仲　同
齢若くありたき願ひ小皺見る　大阪　壽枝女
良い主人小言の後を唄うて居　同
あやしけな人に戸を閉め年の暮　同
子をあやしながら團子をもんでゐる　道後　計加
殘した密柑今あるといゝ山の道　同
障子あけるとと猫は一目散に逃げ　同
酒の量上戸訊かれる松の内　大阪　伊山

何氣なく出たに豆腐屋鈴を止め　同
未練の手雨へ當てゝる夜店だし　同
養子の手前孫のだけ買ふ　同　鳥取　聽松
鳥取はうれし花御柿松葉蟹　同
俺に似て圖畫も手工も字も拙し　同
目覺しが止つた儘の松の内　大阪　與詩夫
案外な若さ廣告燈を負ひ　同
松の内寢にだけ歸る家があり　同
アナウンサーの眞似したりして床屋ひま　神戸　柳川亭
元旦は飲まぬつもりの藥瓶　同
若旦那だけが角帶締めてゐず　同
天井を見上げ女房のつもりもの　同　京城　瓢二樓
計數にくらくもいゝ暮し向き　同
適任にされる涙のない男　同
人生のごちらを見ても霧が立ち　大阪　觀月
結局は形式上のこゝになり　同
兩の手に女の行儀見せてゐる　同
旨印今夜逢ふ妓の事ばかり　神戸　東洋鬼
瀬戸貝屋また雪になる空を出る　同
度し難し藝者ゝ思はないゝ言ふ　同
正月を控へた雨の小賣店　大阪　嘉月
行商のひごく値切れば荷をしまひ　同

寶塚にて

下駄はいて來たを出口で寒く待ち　同　同
飲めないをてらす氣かさはちさひごし　畝傍　籬　楓
令嬢さ思ひきやバーにすひこまれ　同　同　同
君戀しなごさ小娘ませてゐる　同　同　同
柿の色もうこれからは腐るだけ　大阪　芦　穂
解散を怖れる髭さ思はれる　同　同　同
罪の子の良い癖を知る實の母　同　同　同
頁くる音の淋しき一人居る　尼ヶ崎　吟　女
信仰を論じて炭が消えかゝり　同　同　同
あやまらぬをろかさを知らぬでもないに　同　同　同
うしろから褒められてゐる髪の出來　大阪　白　帆
ひき出しへ何か詰つて意地になり　同　同　同
ほころびてやぶれたやうな心かな　廣島　露　斗
出世する土臺なか〳〵見付からず　同　同　同
初成りの便り故郷に接いだ柿　大阪　成　馬
斷食をしたい生駒の灯を仰ぎ　同　同　同
大學を出さへすればさ國の父　尼ヶ崎　虚　白
こさしから神棚の向きかへてみる　同　同　同
思ひ出をはつきりのせてくる小唄　大阪　亂調子
忘却の力死ぬ戀生きてゐる　同　同　同
さみしくば泣けさやしぐれ戸をたゝく　島根　花　情

文鎭に埃がつもるばかりなり　同　同

いたづらに藩屏と謂ふ家を繼ぎ　大阪　桂枝

失業のベンチに語る日もありて　同　同

佛陀より今なでてゐる女の手　大和　勝二

一間の巾に足らないひぢを張り　同　同

一斗の餅へ女房の甲斐〳〵し　大阪　さだを

興奮のまゝ赤赤で突切れり　同　同

内さいにたのめど友は笑つて居　鳥取　源太夫

物質の慰安もなしに子が五人　同　同

獨身で暮すと姉の日記帳　大阪　一騎

賣傳票少くなし雨の店に居る　同　同

只一夜だけのお金へ鍵をかけ　松山　青帆

緊縮を露骨に見せた贈り物　同　同

除隊兵椎の木が見ゝ倉が見ゝ　大阪　素萠

編物の姉さんを呼ぶ丘の月　同　同

火事見舞ついでに寄つてくれてよし　鳥取　穂波子

眞劍を笑ひ話にする近火　同　同

初賣りの何か買はせて縁起よし　大阪　吐句坊

二階借看板の裏知つてゐる　同　同

欠伸の涙がいつまでも殘る　東京　春夫

フランスへ欠伸しに行く果報もの　同　同

愚痴はよせそれは父から言ふ所　大阪　沒食子

このまゝで行けば共産主義になる　同　一羽
むつかしい話暫く波のおゝ　中關
局員は一人電話も鳴つてをり　同
毒藥を俺の處方に盛るらしい　大阪　(凡句郎改め)麥魚
エキストラ斬られつ振りをほめられる　同
お座敷のカルタ騒ぎを居室で聞き　愛媛　空山
正月も祭も天氣次第なり　同
強い者勝を改札口に見る　大阪　大黄
買物の値をあてたがる合宿所　同
碁盤から疲れた眼鳥へ向け　島根　枯楓
三味線の稽古嵐が吹けばよい　同
假橋へかゝつた下駄を固うはき　大阪　主税
不機嫌な人へ火鉢を撫でてゐる　同
風吹くなポプラは冬になつてゐる　神戸　重陽子
よこしまな氣で佛像へ觸つて見　同
指相撲指の長さも負けてから　大阪　喜天
まゝならぬ話四ツ橋一つ越し　同
約束の黨費は出せぬ事成らず　兵庫　春陽
百姓にボーナスもなし年の暮　同
正月を二度する寄の國に住み　大阪　北人
入營の武骨になればそれでよし　同　同
お手ぐらい握つた事はあるでせう　平塚　城月

石女のはち切れそうな肉体美　同
歩くだけなのに道頓堀にする　大阪　夕鐘
病める身に勤勞慾がこみあげる　同
大根のてんでの向きに土を上げ　丸龜　ゆずらん
反抗に喉が疲れた迄のこゝ　同
へゝゝこは撲りつけたい笑ひだぞ　大阪　しかぢ
給料は昇らず姉はひのねうま　同
大部屋の扳ける刀は羨やまれ　武庫川　四方路
ケースこは別にバットの入れごころ　同

道頓堀夜景（一句）

レコードにジャズにラヂオに下駄の音　大阪　八歩
てれる程他人服裝見てはるず　同
爭ふて出たのへ夜の雨になり　松山　夢郷
彩れごその唇へ目刺こは　同
たゞ目だけ首卷の奥にある寒さ　大阪　風來坊
表はさぬだけの不平を女持ち　同
雪なげをうけて乞食は手をひきぬ　神戸　志郎
醉つてゐる手に靴の紐細いなり　同
あの大工いつまで鉋研ぐのやら　大阪　菊路
紋付を脱ぐこ意外な入黑子　同
元旦も働ける身を感謝する　松山　大樓
表彰を受けても見せる父のなく　同

虚勢だが張らねば僕に耐へられぬ　大阪　紫電

孝行でなく母親が欲しくなり　同　同

東京で貯めたへ田舎見逃さず　長野　柳兒

集金の倒されまいとする根氣　同　同

電氣まで俺を見つめて眠られず　螢ヶ池　運坊

勉強を認めて貰ふ父歸り　同　同

非常線カフェーの灯をば寒く見る　大阪　英郎

それ以來夜勤の用も疑はれ　同　同

よく親に似て居るあまり叱るまい　兼二浦　花夢

寒の雨阿呆な音を立てるかな　同　同

禿けたこゝ帽子のせいにしてしまひ　大阪　二竹

三世相信じ過ぎたる父なりし　同　同

吠ゆるのをみんな待つてる檻の虎　堺　太路

長風呂へ他人のやうな指の皺　同　同

爪切つて今日の仕事の一つにす　不明　かず子

コスモスも弱い私も弱い冬　同　同

年の暮道で出合うて金のこゝ　兼二浦　如空

春の世辭互にゆゝりあつてよし　同　同

二タ月も會はない妻の手紙見る　大阪　蒼太

泣けて來る記事に顔をば隱さうよ　同　同

夜逃げゝも知らず子供のねぶたがり　堺　清路

もたいなや二人の留守を母がする　同　同

起上る度に天井が低いなり　吳　光哉
忙しと言へば儲けてるのかと想ひ　同　同
睨むだけが母の威嚴とは哀し　島根　キヨシ
姙ませて戻つたは婚の勝味なり　同　同
足ばかりおがんで樂に生きてゆく　神戸　不然
若氣とも養子云へない戀を知り　同　同
同情をすれど戀ではないのなり　京都　青兒

ステージに立つ彼女

よろ〳〵とさもしく戀を唄ひけり　同　同
吹雪する小驛にたつた一人居る　島根　紫光
食ふだけはあるとるろりで輪を作り　同　同
課長けふふれまひ私用また殖わん　松江　雪緒
女性にも來て貰ひたし辯論部　同　同
ごごごにひがみだなんて泣きたいよ　螢ヶ池　武郎
喀血は頻りだ恩寵を信じよう　同　同
典型にされる短かい命なり　奉天　登美坊
友染の模樣を思ふ戀心　同　同
健康のたゞそれだけの年を越し　朝鮮　救命
元旦のみんなすまして箸をとり　同　同
ホネムーン家鴨の群を見て歸り　島根　專路
憧れて出た大阪で病み續け　同　同
村會は理事者の急所とりにがし　埼玉　積諒

支配人宴會だけはよく勤め　同　大阪　裸人
髪結ふにめし食ふ暇もなかりけり　東京　衣紋
女店員欲しく思つた柄が賣れ　大阪　卜居
赤屋根に住みたい望み海へ出る　大阪　汀月
戸へさわる人氣づかはし大晦日　鳥取　耕民
菊の宴秘藏の種を頼まれる　大阪　沐天
その上に安い芝居に淋しがり　愛媛　花蝶
滿蒙で二十三年夢ごすぎ　大阪　莢一
店員を置くにはあまり小さ過ぎ　松山　松葉
珍客の土產下女まで行屆き　大阪　碧水
集金へ安いカタログ持つて出で　河内　赤笑
田舍道靈氣を踏んで一人きり　大阪　千春
フロックで重役の子を負うてゐる　石川　柳坊
負け惜しみ石を握つたまゝ戻り　大阪　孤愁
スタイルをなほしてノックすれば留守　神戸　卯生
腹心の醉うたのを知る年忘れ　大阪　山茶花
マルクスのエンゲルスのこ働かず　泉南　鯉友
儘ならぬ見晴しいゝが風荒し　大阪　樂鳥
タクシーにのるこ半玉ぢやまにされ　伊豫　嘉久馬
朝風呂の朝酒のこて日を暮らし　大阪　凡々子
ブチブルのまゝに暮そこあきらめる　大津　桃源
馬の自由意志へ市中ざわめく

モガだこは誰も知るまい娘六つ　大阪　悲絽志
よい方へ取つて冗談癖になり　鳥取　青蛙
月參り救世軍を素通りし　大阪　鶴峰
公休日床屋で將棋負けて來る　金澤　一角坊
竹馬の覗いてるを氣がつかず　大阪　甲心坊
痩馬の踏んばつても踏んばつてもぶたれ　松山　大鷲
貧しくも無事な姿を梅に見せ　大阪　憲太
こすくなれこすくなれよこ世が教へ　福岡　不忘
初日の出病室までも麗かに　大阪　樹光
事務所を出ればひらけた次長なり　堺　金太樓
世帶する氣にはなれない死んでやる　大阪　三子平
さて會へば笑顔で濟す苦情なり　奈良　狸風
破裂した喧嘩を階下へ置いて來る　豐中　不朽
可愛いゝこ抱けば着物に泥が付き　伊豫　春市
無理をしたチツブそれ程喜ばず　大阪　英賀夫
叱つては見たが淋しい子の姿　鳥取　湖山
高い橋を渡れば死んだ人のここ　大阪　正博
休みかこ問はれ失業けむたがり　愛知　青笛
つまみ食ひそのまゝ影にうつつてる　島根　茂都子
よく怒る先生の家は二階借　大阪　靜香
兄の友なる齒科醫に
親切が又金の要る齒を見付け　兵庫　無鬼

待ち遠い顔にマントのまゝ坐り　名古屋　草石

爲すこゝもなく春先の窓に立ち　大阪　狂風

唐辛北風のきにつらされて　豐橋　集一

指切りをしてから何か强請つてる　松山　玄々子

許婚やさしい無理で困らせる　大阪　衣童子

平凡な事むつかしく表彰し　大分　蚊郎

こりもちのあるのは彼も知つてゐた　鳥取　佳水

病中

一寢入り氷を碎く音のあり　大阪　定胤

窓明けて浮かれて見たい人通り　吳　仙人掌

この若さこの美しさが繩をなひ　島根　濱郎

スポーツへ娘の親が怨んでる　大阪　愚圖坊

お隣りの名前も知らず狹く住み　奈良　青柿

晴衣なごもういらないこ娘すね　螢ヶ池　半平

若々しさが鏡に踊る十八九　金澤　今雨

屠蘇の酒へみんな明るくかしこまり　堺　幻草

差し向ひいやこ言ふのに又のませ　螢ヶ池　義人

高島田やがての苦勞しらぬやう　堺　竹雪

久方の友の便りは不足稅　不明　量子

そのうちに又こいふ日へ生きてゐる　京都　一念坊

柳界時評

大空から

安井ひろし

川柳界の問題について眞面目に正しい批判を試みたいのが、二月號から執筆して居る此の一文である。所謂寸評的に、或は洒落的に短評を試みるのが、川柳的だといふ考へを正したいと思ふに他ならない。柳界の正しい進展は眞面目な正鵠な批判によらなければ、たちなほらぬと思ふからである。勿論此一文は私一個の管見であつて、私自身の研究、考察、批判を述べるに過きぬから所論の誤ちは諸氏の是正に待つもので、其點決して吝ではない。幾分でも、この混沌とした柳界に裨益するを得ば、不敏な私の欣びとするところである。

改造二月號に發表された『新川柳に現はれた社會の顔』…井上劍花坊氏…は柳界にとつて見逃しの出來ぬ一文である。

第一に、改造のやうな社會的存在をもつ大雜誌が柳人の原稿を掲載するやうになつたといふ事實は、漸く川柳を社會が認めるやうになつた時代的一エポックとして、私共川柳の社會化を解き來つたものには、こうした機運を孕んだ柳界の進展を喜ぶといふ事である。

第二には、その發表されたる一文が、筆者自身『まだ〳〵あまねく文壇、詩壇の人へ呼びかけるには貧弱だと見られるかも知れぬが、これが二十八年間の僕がいつぱ　の努力なのだ』と述べられて居る如く、あまりにも貧弱な一文で、正しく現時の柳界を紹介せず、社會人をして川柳の價値を誤らしむるものではないかと思はれ、劍花坊氏以外の全川柳界の人々は各々の立場から此一文に抗議せざるを得ぬ程度のものだといふ事である。

第一については、永年詩壇の下積となつて居た柳人達は何人も柳界の喜びとする事に反對されぬであらふ。が然しこうした機會にこそ柳人は自重し、柳界全体を負ふところの責任を感じ、權威ある研究を發表し、「川柳とは如何なる詩であるか」に就いて社會人に正しい川柳觀賞眼を養はしむべきであつたと思ふ。

第二については此論文(?)の構成と社會人に與へた印象を以下檢討してみたいと思ふ。

改造誌上に堂々十五頁に渉つて展開された大文章六百十八行の内、三百八十四行は現時の柳界と沒交渉とも云ふべき川柳を無數に併列し、文章は僅に二百廿行といふ拙劣な構成をなして居る事を考へねばならぬ。川柳に就いて完全な豫備智識を持たぬ社會人に對し、興味を持たしめるために示されたる過去の時事吟が、

然も狂句じみたる川柳で、筆者自身もその誤れる事を認識して居る時事川柳を多数に陳列して識者の顰蹙を買ふて居る事である。

劍花坊氏の川柳革新の收獲が過去二十數年間に於て、如何に無方針、五里霧中であつたかは

上村は露西亞人かやへコノジョウ

なごいふ自ら狂句じみたと稱するものを掲げて居るによつても明かである。其他明治、大ﾛに渉つて時事川柳を年代順にならべ『新川柳に現はれたる社會の顔』といふ示し方はあまりにも詠史川柳本位であり、そこに示されたる社會の觀方が表面的で社會の胸奥に潜む苦惱にふれず如何にも淺薄であつて、樂天のポンチ繪回顧を聽く如く、風俗畫報をみる如くで

居候三杯目にはそつと出し

の穿ち以上に出て居らず、川柳の革新ではなく、退歩の徑路を語つて居るに過ぎない（此事は筆者自身も認めて居る）然もそれ等の歴史的事實に對する時事吟の一二を示せば充分語り得る川柳の諷詩的價値を、如何に『社會の顔』なりとするも無暗に駄句を多く例示した結果は社會人をして川柳は駄洒落を出ぬと誤解せしめはせぬかとあやぶむものである。

次に筆者の説く「あらゆる詩……を超越して時代の尖端に迫らうとして居る」「社會意識を經とし、現實生活を緯とし、之を綯ひ交ぜて感覺より理想に向上する」といふモットーで製作された川柳が示されて居る。これらの川柳は所謂柳樽寺一派の新興川柳と無産派川柳でその價値はしばらくをくも（階級意識に眼覺めて生れる川柳については機を見て述べる）それらの句に對しては何等の解説もなく、味ひ方も示されて居ない。だから川柳の觀賞に馴れぬ社會人にはその句意すらも判らぬ結果になつたであらうと思はれる。

其他には婦人川柳の紹介と、柳樽寺一派の柳人を紹介し「川柳人」の歴史を語るのみで筆者が排撃される神秘派とか既成川柳とか江戸萬能派とか生命派とかの川柳については、社會人にどんなものか辯別のつかぬ抽象的文字をならべて批難して居るが、恐らくあの一文からは何等の理解をも持ち得ぬであらふから、柳樽寺派川柳がそれらの各派のものと如何に異り川柳の本質的價値がその何れにあるかは分明せぬであらふと思はれる。むしろそれらの各派の句を示し、具体的にそれを批判して筆者の主張するらしい階級意識と川柳の關係でも述べて柳樽寺川柳の存在を意義づけなければならなかつたのではないかと思ふ。

結局この一文は劍花坊氏の老の繰り言であり柳樽寺派の昏迷歴史であり「川柳人』の廣告から一歩も出て居ず、社會人に現代の進歩した新川柳に現はれたる眞の社會の顔……深刻なる川柳觀に現はれた社會相を……示す事なくむしろ罩つた川柳觀を抱かしめ、ポンチ繪的川柳の明治大正史を示して柳界を侮らしむるのみに終つてをる事を痛嘆に堪えない。

私は社會の人々があの一文に誤られる事なく、他に眞の新川柳あるを知つて充分にして正鵠なる觀賞眼を養はれん事を祈るものである。

私の知人は改造の讀者から『川柳しつまらぬものだね』と云はれ約二時間もその辯駁に努めたといふ事である。それでも兎に角川柳についてあの一文から社會人が關心を持つたと思へば忍ばれよう、其點たけは劍花坊氏に感謝してをく。

月評 卓を圍んで

路郎、紋太
山雨樓、ひろし

近作柳樽　ひろし提出

眠る事それが木賃のユウトピア

孤　愁

ひろし……食ふだけの生活がやつとで、眠る事だけがせめてもの慰めである、木賃宿の定住者の諦めたやうな生活を見てゐる。

紋太……うまく輕く云へてありますれ。其の輕さに引かれて思はず微笑まされます。併し寢るは極樂とよく云ひますが、夫れと同じ内容しか持つて居ない樣に思ひます。木賃の光景がもう一つ浮んで來ない。

ひろし……作者が今少し、此不合理な社會に對して批判を持つて居れば、此一個の木賃宿に眠る人に對してももつと深く思索して深い内容のあるものを表現し得たであらう。川柳が思想を背景に持たなければならないと云ふのは、此處の事だと思ふ。(此時山雨樓氏出席)

山雨樓……紋太氏の說に同感であります。そして表現が稍說明的でだれて居る感があるやうに思ふ。

ひろし……そう云ふ感じは「それが」が說明的にして居るのではないか。

紋太……併し此句は朗かな感じがしますね。此句主は朗かな心持の人だと思ひます。二句目の「首にする氣か叱つてはくれず」でも事實は困難な場合であらうに、矢張朗かな心持が出て居るやうです。

路郎……此句が說明的であると云ふ事も、それから寢るは極樂と云ふ意味しか詠つて居ないと云ふ事も同感である。私がよく云ふ樂々と作つた句と云ふのである。作者が實際に木賃と云ふもの、其の中に蠢めいて居る人間を本當に知らない處から生れて來る弊だと思ふ。此儘では餘りに暢氣そうな見方であつて紋太氏の朗かなと云ふ說が出て來ても仕方があるまい。同じ作家の「首にする氣か叱つてはくれず」の方は寧ろ暗い氣持が流れて居て生きた句として推賞することが出來る。

山雨樓提出

去年より寒いに毛布毛が抜けて

柳　月

山雨樓……實感の句として純情が溢れて居る。そして一抹の淋しさが流れて居るのを見逃す事が出來ない。

紋太……もう仕舞いですか。ふらい簡單ですなア……本當にそうです。毛布を凝つと見て居て思はず口に出て來たやうな句だと思ひます。讀んで本當にさうだと云ひたいやうな同感が起ります。

ひろし……上の句の「去年より寒いに」と云ふ感じ方が本當に感じたのでなくて、唯さう作つたのではないかと云ふ疑ひが起きる。

路郎……それは少々く酷な見方ではあるまいか、毛の拔けた毛布を事實見ながら詠んだ句ではないにしても、さうした毛布にしみ〴〵と感じさせられて詠つたものに違ひないと思ふ。

ひろし……僕には何うも作爲的に見へる。

山雨樓……凡人凡情とか云ふことがありますが、去年より寒いと云ふ感じは誰もが云ふ事であつて、その寒さが身に泌みて來るのを斯ふ詠つたものであらうと思ふ。勿論此場合

これ以上の表現が無いとは云へないけれども、其處が所謂凡人風情たる處だと思ふ。

ひろし……此句を惡い句だ、と云ふのではない。佳句として受容れていゝのではあるが、此句の重點は「毛布毛が拔けて」にあると思ふ。其の佗びしさを強めるために「去年より寒いに」を用ひたのであらう。僕は毛布の毛が拔けて居る、夫れ丈で充分 其の氣持が出るやうに思へる。其のために上の齣に對して不滿を持つのだが、其れは餘りに作者に重荷を負はす事になるのかも知れぬ。

紋太……ひろしさんの云はれるやうな疑ひもあるにはある、それは音律から來る感じが浮はついて居る點があるからでせう。併し全体を通じての純情の力がそれを補ふ 居ると思ふ。此句は陽氣な句を好む人には向かないだらう。

山雨樓……蛇足のやうだが、此句の價値を理論附けるために、此句の川柳味に對して考へて見るに、「毛布毛が拔けて」と云ふ事實は夫れ自身が一つのユーモアを物語つて居るのであるが、夫れが作者の佗しい、暗い感情とピッたり一つのものに溶けこんで居ることに依つて此句が力强く押出されて 居るのだらう。

路郎……大抵もう評としては盡きてゐると思ふが、毛少し附け加えていふと、この毛布の毛が拔けて居るのを 凝つと見詰めて居る作者にとつてはしみ〴〵とした 氣持ではあらうけれども 此句を第三者が讀んだ時にはほのかに滑稽な悲慘味が首をもたげて 居ると思ふ。其處が同じく純情を吐露した句であつても短歌などの行き方と少しく 異つた點ではなからうかと思ふ。

山雨樓……そしてそれが川柳詩人に 惠まれた特權だらうと思ひます。

路郎……兎に角此句から作者の淋しい しよんぼりとした姿が窺へるのは 句其のものが實感から生れて居るからであつて、前の句「木貫の句」のそれと違つて大いに働きのある處である。

紋太提出

腰の邊が兒なしの夫婦うそ寒く

卯生

紋太……多くを云ひ過ぎたやうで もあるが思ふ事を皆云ひ得たと云ふ句だと 思ひますひろし……子の無い僕には、しんみり感じさせられる句である。

紋太……嫌な感じがするのと違ひますか、冷やかされて居るやうで。

ひろし……いや、此の通りです。

紋太……私は子の無い夫婦を見て 居る句だと思ひましたが、夫婦自らの句でもあるやうにも思ひますが。

ひろし……無論子の無い夫婦を 見て居る句です 併し兒の無い私には適切にそうだなと思はれたのです。

山雨樓……此句は第三者から 見た句に違いないとは斷じられないでせう。寧ろ兒なしの夫婦自身の心持を詠つたものと 見る方がうけとれる。

路郎…… それだつたら「兒なしの夫婦腰の邊りがうそ寒く」と云つた方が頭へはつきり流れこんで來ほしないか。

山雨樓 …それは句主が不用意と 云はふか五七五の定型律に囚はれたための未熟な叙法であつて、そうとしては何うも第三者の句ではないやうに思ふ。

紋太……自らの句としては餘りに 叙法が客觀的では無からうか。第三者の觀察で無いとすれば叙法が未熟であると 云へるかも知れぬが、私は第三者の觀察であると思ふから此の儘で佳句として受容れ度いと思ふ。

ひろし… それから先程山雨樓氏が 五七五の定型律に當嵌めるためと云はれたが「腰の邊」は「腰のあたりが」と讀ますのではないか

山雨樓 …成程「腰のあたりが」が七字であつて先程僕が定型律云々と云つたのは 誤解であつた。けれ共主觀の句であると云ふ事は覆へしたくない。

路郎……此の句が主觀と客觀の 兩方に採れるとしたならば それは矢張叙法の罪だと云はなければならぬ。今少しく助辭でも入れて句意を明らかにしなければなるまい。

ひろし……僕は此の儘で充分 第三者の兒のない夫婦を見て居る事が解る。此の句の見何けどころが腰の邊りにある のであるから何うしても客觀の句だと思ふ 詰り腰の邊りのうそ寒い夫婦を見て、如何にも兒の無い人にはうそ寒いところがあると感じたのである。

路郎……斯う直したら何うでせう。「兒なしの夫婦の腰の邊りのうそ寒く」と「兒なしの

夫婦腰の邊りがうそ寒く」とすれば前者は客觀で後者は主觀として はつきり受けされると思ふ。兎に角此の句は客觀の句だと思ふが前述のやうな意見が出たので以上の 事を述べて見たのである。

川柳塔　路郎提出

催促の鼻をかむまをホツトする

多　聞

路郎……此句を讀むと催促をされる 人のせつない心持がよく出て居ると思ふ。催促をする人が鼻をかんで居る 態度もよく出て居れば、今借りた人がさうした僅かの時間にホツトした純情さも共に浮び出て來て 氣の毒なうちにユーモラスな感じが湧いて、今の世の中といふものを思はされる。

山雨樓……「催促の」としたところが何んでも無いやうだがうまいと思ふ。

路郎……一寸紋太氏が作りさうな句だれ。

山雨樓……紋太氏にしては下五が ちよつと弱過ぎますかな。此場合は適切なのだけれど

路郎……成程叙法は紋太氏と異つてゐるが、掴みどこが紋太氏らしいところが あると思ふ。

山雨樓……三太郎さんではないが 川柳は睨むと云つた、睨みが利いてゐる句だと思ふ。

路郎……催促の句でこれ位 細かいところを掴んだ句る見た事がないと思ふ。こう云ふところに句が落ちて居ると云ふ事を 發見したのは確かに作者の手腕である。

紋太……作者は深く見てゐるのだ。よく知つて居るのだ。それを輕く表現したのだと思ふだから輕く受けつて微笑めばよいと思ふ。餘り譽め言葉の無い方がよいと思ふ。

山雨樓……こう云ふ境地をとらへ 得たところを敬服するので、句の傾向とか思想とか云ふものを譽めるのではない。

路郎：　勿論僕も思想が何うだとか 傾向が何うだとか云ふのではない。寧ろ其の點から云へば同じ作者の句の「叱られる女房とならば安からん」の方によりよきものがあると思ふ。唯掴みどころの意表に出て居るのに敬服したのである。

山雨樓……此句のやうな境地が 見逃がされ易いやうに、此句は見逃がされ易い輕さしか持たないやうであるが、之を見出す觀賞眼の必要さを心懸けなければならぬと思ふ。

ひろし提出

人一人殺した牛がぽかんと居る

雨　町

ひろし……「ぽかんと居る」が如何にもぼかんとして居てうまいと思ふ。

紋太……餘りこだはらない 叙法はいゝと思ふ。「人を殺した」と云ふ事が少し唐突な感がするやうに思ふ。

路郎……唐突な感じがしたところで、それが事實であれば仕方がない。

紋太……夫れが思いと云ふ程ではないが、讀む者に其の事が浮んで來ない怨みがある。

路郎……僕は寧ろ其の唐突さが、此の句の生命であると思つて居る。そして近頃見た句の中では可成強い句として敬服して居る。

紋太……僕も夫れを認めて居るものではあるが、味はふと云ふ意味から句の力を認めながら何か云ひ度いやうな氣持が殘される。

山雨樓……牛がとした「が」の字が 此場合強過ぎるので却つて味をそぐやうな 氣持がする。寧ろ「人一人殺した牛のぽかんと居る」とした方が味が多い樣に思はれる。それと「人一人」は「子を一人」とした方が人物がはつきりとして事件的に面白くはないかと思ふ。假令それが 川柳的マンネリズムであらうとも。

路郎……僕は「牛が」を「牛の」にする事には反對である。「が」を「の」にしては殺したと云ふ大きな事實の前に 表現力を弱はめて仕舞ふからである。それから「人一人」を「子一人」とか「娘一人」とか云ふやうに事件をはつきりさせや うと云ふ努力も、無意味な努力で人を殺した牛がぽかんとして居る點に 此句の主眼がある以上「人一人」と云つた方が何處迄も牛そのものを主人公として 扱つて行く上に力強い表現法だと云 はればならない

山雨樓　…成程「人一人」は僕の說も餘りに小細工のやうである。併し「牛が」の「が」が強過ぎると云ふのは斯う云ふ風にもとれる、人一人殺した牛であるのに、牛なれば、そぼかんとして居ると云つた風な理屈的な、叙法が耳につくのである。其の點は多少弱くなるかも知れないが「牛の」と置いた方が救はれは

しないかと思ふのである。

紋太……此の句が出來た心持には、僕は尊敬してゐる、併し「人一人殺した」と事件的に叙された其の事件も、作者一人のものであるやうに思はれる。僕として尊敬して居る以上觸れ度くはないけれ共「人一人」の「一人」が此の句として無駄ではないかと思ふ。一人を入れるなら僕だつたら「牛よ」とするかも知れぬ。それよりも「人を殺した牛がぼかんと居る」の方が作者の氣持が出るのではなからうか。

山雨樓……其の「人一人殺した」と云ふ言葉は前の「去年より寒いに」と云ふ句にあつたやうに、有觸れた世間なみの言葉を生かして使つたものと解したい。

路郎……成程　さう云ふ事は確に云へると思ふ。そして此場合の「人一人」と云ふ言葉は「人を殺した」と云ふ言葉よりも表現上の強さを表はすのにより適した用法であると思ふ。

山雨樓……それから且つて、層雲の俳句の中で馬が子供を殺して畫さがりに　草を喰つて居たと云つた風な句を見たことがある。其の句があるからと云つて此句を　類句として價値を疑ふと云ふやうな事は　勿論ないのであるが。表現上に於て對象として見るならば研究すべき何物かがあるやうに思ふ。

ひろし……作者は牛がぼかんと居る　事に衝動を感じて、其の牛に人を一人殺させて其牛が其處に存在して居る驚きを　表現したのではないかと思ふ。つまり人一人殺したのは作者の幻想ではないかと思ふ。

路郎……幻想とは受取れない。殺したと云ふ斷定的な言葉で其の事實を現はして　居るからには　矢張さうした事實のあつた牛がぼかんとして居たのを見て、作者の強い感激から生れた句だと思ふ。勿論牛がぼかんとして居る反對に人一人殺された　其の騷ぎが一方に想像されなければ、牛のぼかんとして居る事にこんなに強い表現は出來ない。

ひろし……僕はさう云ふ風に村人の　騷ぎと云つたものによつて相對的に　効果を擧げやうとする在來の川柳的に見度くない。つまり重大な出來事を起して置きながら　其れを平然としてゐる氣持に興味を持ちたい。

路郎……私の云つたのは夫れを　對象として云ふ意味ではない。併しさうしたパツクが取除かれてそれで重大な　事實と云ふものを思ふ事は出來ない。假に我々が電車で一人の人間が轢殺された記事を　新聞の隅に見い出した場合と實際に轢殺されて居る　實現にふれた感激の相違を考へて見たならば、此場合の牛が人を殺したと云　ふ事實をあり〳〵と見せて與へた其の後のぼかんとした　擧動に強い刺戟を受けたと受取らなければ　此の句の強さは半減されて仕舞ふ。

山雨樓提出

醫者を迎へに眞夜中の霧

町　二

山雨樓……叙景的な句であるが……

ひろし……叙景的と云ふよりも　感覺的ではないか。

山雨樓……此句にも川柳詩人の　ゆとりのあるところを示して居る。眞夜中に醫者を迎へに行くと云ふやうな差迫つた場合にも、猶自然の心の中に浸る事が出來たのである。つまりさうした、いら〳〵した場合にあつて靜かに自分の姿を振返る事の出來る氣分、更に總てを自分の詩情の中に溶けこます　事の出來た點を推賞したいと思ふ、云はゞ自分の生活其のものを本當に愛する心の現　はれであるやうに思ふ。

ひろし……リズム的にもいゝ、詩だと思ふ。

路郎……眞夜中であり、霧の中であつても病人に對する不安を思ふ　作者の息使ひがはつきりと感じられる處に此の句の長所がある。

山雨樓……此の句を提出した理由に　關係があるので餘談のやうだが附け加へたい。それは此の作者の他の句例へば

をろかなからだへ炎をすえてる
失業の齒ばかり白しうら寂し
酸味ばかりが殘されし春
逆境に處して寂しや眼が尖る

等の優れた句があるが、それ等は何れも僞はらざら心持には違ひないにしても、現在を否定する、或は現在の不滿、傷心、を詠つたものが多い。提出した句は謂はゞ逆境にあつてしかもその逆境をもつてめて　自分の生活を樂んで居ると云ふやうな境地が　窺へるので其の點に興味を持つたのである。偶々今日或る俳人の書いたものを見て居ると、生活を詠ふと云ふ事に就いて、自分の生活を心から樂

（五一頁へ續く）

川柳塔

○　出口雨町

算盤の立たぬ鶏ばかり飼ひ
世の中の馬鹿は日ばかり數へてる
空に星地に人の子のものおもひ
餅やけば餅に心をうばはれて
酒だけが俺を見捨てゝくれぬなり
もう一度をこしに來れば起きる氣の
お月さまにさようならして戸を締める
指輪買うておまけに指へはめてやり
牡丹はけ彼女の首のほそ〳〵こ
初戀の笑へば笑ひかへすのみ

兄こいふオールバックに子が抱かれ
山盛りの飯がうれしい男の子
ボンボンに代數だけが鬼門なり
マルクスはこう言つてるこ負けてるず
あつ燗が萬よし論にさめてゆき
いま來た妓いきなり酌を強ひられる
待合の電話で社務がひこつすみ
婦人科できけば夫の罪こ知れ

○　朝田新水

戀人のしかも妹ほごの年
人間を手渡すまでを護送こは

勞力が金に變つてゆくみじめ
貨車の牛神戸をさして急ぐなり
張り切つた乳に女優の身の悲し
内職が花見の人を眺めてゐる
年寄の寢顔靜かに夢がさめ
流れあり〳〵密柑の皮浮く
出來る子も皆年頃に歿くしてる
下女の戀仕事がそれとなくおくれ
參考人に呼ばれ女將出て行く
引つ掛けた帽子も稼ぐ道具なり
お隣の留守は仲居に行つてゐる
持參金一生食へて餘るなり
人妻の世辭がすぎても嫌はれる

住田亂耿

○

選擧記事よあながち支那を笑はれず
こびこんでからも主義者として惱み
食パンと大學出との賣行よ
麻雀に戀を忘れしにはあらず
冷たき女なりしが手紙を寄越しぬ

去りゆく友へ（二句）

戀の痛手とはいへ賀狀くれしのみ

JAZZよりの幻想（三句）

ネグロの部落まださわがしく星月夜
椰子の影ながら〳〵暮れてネグロの子
土人にも好き嫌ひある闇の色

卒業目捷（四句）

多ければ丙といふ字もこゝろよき
就職の爲の徽章はいたゞかず
卒業といふ清算のインキ壜
背廣きて背廣ののろけ聞いてやる

岩本素人

○

道後で落す巡禮の垢
無造作に大根を切る女房にて
捨鉢を思ひ返して寢る淋し
可哀想に山羊の白さへ冬の雨
痔の痛みこらへて無駄な話聞く
政見は借りもの髯は俺のもの
若水を汲むやポンプのあつけなし

麻生葭乃

○

木綿着の心安さよ子と眠る
自惚れなそれは金へのお世辭也

鮎美さんの結婚を祝して

脊の君となつて有馬の霧に立ち

伊藤綠之助

○

まだ去なぬ客に蓄音機をかける

驚いた雞に轉げし植木鉢
さはあれど木魚に落ちし涙なる
久しぶりねと言うてくれたばかりなり
のびろ〳〵欠伸もしてね
よく見れば冬の雲とて靜かなり
何うしてもこゝわる氣なり妻楊子

長谷川一徹

○

良く吠へる犬に家主は安心し
金で濟むものと金持ち思つて居
鰯雲の話で醫長室を辭し
醉ひしれし風して踊る彼不惑

東京の弟に男の子生れしに

ツェッペリンの音はお腹で知つて居り
同じ血が通つて居るこ君思へ
病みこじれいよ〳〵かつぐ事となり

伊藤愚陀

○

高らかに笑へど影の小さし母
飲む事をいつはらぬ子の淋しきか
白髪とは悲しきものを持つ母よ
死ぬを思へばいさかひがいさかひが
逢はぬ日に浮ぶ顆のなほ白し
おなじ嘘なら嘘らしい嘘をつけ

二の腕の眞白きおなご夢深し
度胸がないと女言ふなり
枕にこへば枕は寢ろと云ひました
四十の戀の耳そうじかな
くちづけと言ふが惡夢のうちなりし
もの憂きまでに女あまゐる

水谷鮎美

○

結婚(二月三日)

末廣をかたく握りし今宵かな
くもさかづきに心をすへり
今宵をば灯に美くしき人ならむ

有馬にて(二句)

花嫁の小聲がのごにひつかゝり
湯の宿の火鉢にふたり咳二つ
宿の朝妻のにほいや茶の匂ひ

後日小感

新妻の聲が襖にうち返り
うれしさのませば眼鏡のいる母よ

松丘町二

○

公式の如き運命を嘆ふ
生活線の右翼にありて卑屈なり
酒のめば酒人戀へば人背く

恩に被る人のみふゐて春寒し
魂を賣れば食ふには困らぬが
耳の毛へほそ〳〵と來る夜の霧
執着は椿の花にまかせとけ

友の幼兒逝く

戰はで逝く安けさがせめてもの　岩崎柳路

○

亂箱醉うて寢たとも思はれる
ハルピンへ行く兩換に寒う立ち
淋しさに庭下駄はいて門に立ち

中島鐵州

○

日に二枚縫へばと母と娘の話し
片つほはもうはいて居る足袋を編み
末の子に傘が重そな雨が降り
一息と云ふも他人事なればこそ
一票がどうでも欲しい手紙が來

酒井駒人

○

父の無い子が竹馬を借りて來る
何不自由なく啞の子十の春
生活が母を女將と言はせてる
落ちてゐる椿へ春の雨が降り
燒芋屋湯氣をば冬の街へ出し
出無精な母が出て行く冬の街
長靴で來れば埃のつづく町

松盛琴人

○

ぞんざいに言ひ合ひゐと何處かへ出
藝事を仕込まれた譯養女なり
一票をたばかられる愚直が悲し

春場所の國技館にて　二句

出羽ケ嶽ちよこ〳〵されてちと困り
勝力士鬢の亂れへ名乘られる

橋本綠雨

○

冬の日に立つてゐられぬ橋を越ち
風吹くな稼ぎてはまだ戻らない
噴水も止り雨戸もしまるなり
砂湯の話硝子戸のガタンゴトン
竹馬に乘つて町はづれに遊ぶ
柵をくゞりに行く犬も春らしく
地均しに草を燒くのも仕事なり
走りゆく人も寒さを知つてゐる
湖を汽車から見ても荒れてゐる
叱つたのをほつとけぬとて探しに出
くさむらの中に小さき墓口よ

◇ 阿部閑生

お座敷へ炊ぎの煙流れくるよう書いた手紙又見る箸のまも壞れゆく頭のまゝに外は春死ねかしと頸筋撫でて風はしる帶結ぶ子の不器用を見るにつけ生き飽きぬ呼吸する事も憂き一つある時は他人のごとく我を見る

◇ 櫻井圓角

傍の目にごこに不幸があると見に獣がお金を持つた旦那ぶり氣休めの晩年よしと云うてくれ日本だけ照るのじやないと出たつきり首にされついた教育邪魔になり滿腹に久方振りの笑ひも出姙娠したらしいワで男逃げ順調のつい人並の氣が起り成功して看てあげますと云うてたに當らねばよいがと思ふ罰が來て御自慢のもう一息と氣がつかず動物と同じく理性なしで生きわけ分らずに戰に戰つてフアストインプレッションがあるかったと妻の云ひ皺へまでお化粧してる氣の毒さ曲藝のさ中にあると氣が付かず孝行の息子を嫌ふよめごころ

電話帳堅く信じて繰つて居り

松田多郎

◇ 葬儀所にて（二句）

職業もこゝまでくれば人をやき逝きし人かげより送るつらいこと

植田湖舟

◇ 病みついてからの寢卷が破けて來全快をすれば東京へイラッシャイ土へ話せば土がもの云ふ轉宅を金の力がせきたてるペットから見る雪空は降ればよし

須崎豆秋

◇ 眼を閉ぢて居れば大阪聲がするのつそりと外國人に追ひ越され濕布した惡友が來る春の雨戸を締めて又戸を開けて人生や男らしうやつて居た日にや食へません返事せぬ夫へオーバ被せかける極道の傘もさゝずに歸つて來

若井たけし

◇ 舞妓のあわれは貧りて喰ふ今宵の湯槽のまたけむりて悲し

田中八郎君結婚す

戀愛の墓場だなごと笑ひ合ひ

中見光路

◇ こゝも亦昨日にかはる貸家札

柔道の帶を風呂屋へしめてくる　中澤濁水
目さむれば茶づけの茶ッ葉きざむ音
いぶせくも立志の本を子にゆづり

◇減つてゆく來賓用の上草履　丸山公二
敎へ子ゝ知らぬ藝妓の笑ひ寄り
効能書ゝう〳〵利かぬ病なし

畑手入れつゞかぬ蔭を椽へかけ　松村敏郎
女工から車掌女給ゝ墮ちてゆき
若かつた互を語る自髪を見

酒はある頭へは來ぬなゞゝ酌ぎ　西村市公

◇官服をぬげばかいろが辷り落ち
醉ひしれてゐるが力ゝ賴む人
暮しよくなつたゝ見ゐる薄化粧
邪魔くさい返事をすればいゝ話
藝のあるこゝも褒めてる送り膳

◇正視出來ぬ程に五十に近く塗り
中折れになつた子供へほくそ笑み

◇會社へ行つてぬくもつて來やうか
笑ひ顏親ゝ親ゝにはさまれて
敬まつてゐる人さへも醉ひつぶれ
いち早く目立つ群には父がゐる
よい月だ殘業をした顏へ照り

◇風呂へ來て悲しくなつた病み上り　安西杏三
受附はいゝ明瞭に恩を賣り
うまい洒落云へて社長は氣を直し
一行で足りる日記も四十過ぎ　森石竹

◇子の顏に似たる石つるりなぜる
重なれる石あり慕はしくもうひゝつ重ぬ
淋しさに堪へられず時計を締める　桑原京郎

◇雪よ降れふれ逢へた今夜だ
許ゝすゆるさんもないじやないかい火がいこゝ
妻君をほめてゐるのに欠伸をし
おゝ寒月！これこそプロのすがたなり
偉業なるこゝに頭が下るなり
ごうぞこうぞ生きてますのは握つてる
踏み臺になる一票を入れにゆき　池田雪峰

◇又身賣りする氣で候補したらしい
返事來るらしい娘の今日休み
不意を喰つた娘は猫の樣な顏
失禮な金で妾を得やうなぞ　上田柳影

◇海のひろさ我が足跡の小さき
成功へ〳〵馬鹿になりおほせ

竹馬居雜筆

蛭子　省二

（四）「酒の新聞」を惜しむ

酒呑みは、まづ酒量の多い事を自慢し、いかにも通人らしいリクツを列べる、私はこれを酒の中毒とよぶ、汀柳兄の『酒の新聞』をみても、執筆川柳家の氣焰が、隨分その酒毒に罹つてゐるので、おかしい。

趣味的に、（商賞本位でなく）、釀造を續けてみると、小酒屋であればある程、全體が人力を傾倒しての仕事だから、合理化ーキカイ力を借りたー大量生産者とは相違した、信仰心がわく、酒の講釋ほど、むつかしいものはないのだ、單なる晩酌黨や宴會屋で、酒をあげつらはれて、クダを卷かれては、あたり迷惑に過ぎぬ。

高木さんは下戸だそうで、

「汁粉は酒で無いと云ふ理論が、どうして立つのだろう、下戸は澱粉を組製の儘に喰ひ、上戸は澱粉に溫度を加へ水を加へて飲む、其形式は變つても其實質に變化は毫もない」

と、主張さるゝに至つては、よし酒の機關紙の老記者だと言はれても、餘りに釀造事業者をないがしらにしてヒドい、酒の製法及貯藏の苦心がわからなさ過ぎると泣かされる。借問す、ダイヤモンドと消炭は、等しくカーボンである、が、消炭の指輪で喜むでゐる細君は、見た事も聞いた事もない、酒のまぬ都會人の化學智識中毒も亦恐ろしい。

靈泉寺溫泉から＝一度本誌に寄稿した＝學友與水兄が、

「溫泉巡りをかね、土俗と古美術の行脚ー宿へ着いて湯に入り、炬燵で盃を上げる快亦云ふべからずー酒の神樣松尾神社（山城の外に）に就て調べてみたい、其後酒の新聞はどうなりました」

と、ハガキを寄せられる、曾て『いもづる』誌の酒呑番附で、大關格の君だ＝其時私は 輝 かつぎ二合五勺＝私は廢刊になつたと認める返事が、淋しさに堪えなかつた、そのかはり『川柳雜誌』に酒を物語るは、當然の成行であらう。

酒好きの盃泉君から、東京の酒屋巡禮の通信がくる、常に岡島さんの噂もかいてある、『玉虫』誌一月號に理研酒の記事があつた、私は利休を口にした事がないから、質に就てはいはぬだが私の親友卽ち私同樣の貧乏ら浪人共から、東京に住むで利休を賞愛するより外ない、實情を訴へられる、米からの有難いお酒が、餘りにも高價じはないか、私は靑山の醉心大賣捌店の附近に住むで、いつも陳列窓を覗いては、一瓶六圓こは何んだこ思つた、稅金が高率になつたこて、實際內輪でソロバンをはぢくこ、原價は素人の想像程かからないものなので、他のクダラヌ競爭策の費用が轉嫁されるからである、雜貨屋から三圓の酒をこつてゐたが、マヅい、繪入柳樽二篇に、

安酒屋井戸神樣にたすけられ

で、人手に渡るたびに、水が加へられてはたまらぬ、してみれが都會のプロソタリヤは、一圓八十錢の利休で滿足を買はねばならぬ、（一圓八十錢ら無論高いのは廣告費なごの關係であろう）、理研酒の出現はプロの幸福だこ思ふ、酒の信仰は徒らにウマイ〳〵こいふ事のみであつてはならぬ、ウマイものが安すく、私共浪人の口に入る絕叫であつて欲しい、今日までの酒の通人は餘りに、自我本位なのである。

居酒屋趣味は、日本酒の大衆化で、コップ賣は良い酒を、安すく賣つても、損はない處に妙諦があるのだ、『酒の新聞』に

居酒屋で念頃ぶりは立つてのみ　（古句）

の講釋があつた、コップでは減るのがすき通りすぎる、『唎猪口』でこいはれた杉村さんは、流石に酒問屋の若主人公丈けある、私は非常に小さい盃を好むは、指が細いからで、又一ト口に呑みほす味を知るためでもある、一方大深（約一合）、中深（約七勺）の唎猪口を用ゐる、こは浪人臭味から出てゐる、現今では唎猪口をみせて吳れる程の居酒屋は、もう減つてしまつた、元こ檢査用のもの、色冴にをみるためのもので、紺靑色三重の圓が底に描いてある、京橋武藏屋製は斯界でも有名であり、大深で一圓二十錢も出せば、上等品が求められよう。

私はレッテル酒を欲しない、商標でのむ酒は高い、旅先きでの地酒は、土地の俚謠なごの持味に等しい、米も水も地に合つてゐるではないか、故に灘や廣島酒を口にし得ない事を恥こも思はず、又不平なごは起らぬ、志賀重昂先生は、私共の酒をほめてくれた、地酒はおつこりした處に親切味がある。

唎猪口のテリみて邪魔な戀猫　省二

（五）鍼療治と竹瀝

田舍に居つこ特種の人々がくる、人相見、姓名判斷、八卦兄‖此方は私もボツ〳〵研究しつつあら‖等々、そして一圓から五圓の料金で相應の收入を得て引揚げる、一日友人が『私の手相こ姓名は、女に負けるそうで、其後妻をやりましたから、男を二人もつこ言つたそうです、私が早死して、アイツが再婚するこいふ事になるのでよう、だかい名を替えてもらひ

ました。』

『ぢや、今度は君が二人を女を持つことになるのかネ、そして手相の方は、どう工夫しました』

と笑つてしまつた。

電氣療法、灸點師、精神治療等々、一圓から三十五圓といふので、喘息持の私は、此方面からはよく勸誘を受ける、その同情には深く感謝しつゝも、未だ一回も出掛けぬのみか、時に斷然排斥してしまふ、此頃老父の別宅へ、昔のコテ療治式の電氣療法屋さんが通つて居る、心地が好いそうだ、川柳風俗志に

堀部に投げられ彌次兵衛でコテ療治

人間の燒繼をするコテ療治

コテ療治羅漢のやうに列ぶなり

コテ療治醫者の玄關へみんな粗相者

革提の疵縫うてからコテ療治

ちちんぷい〳〵母親のコテ療治

大名を二軒名乘つてコテ療治

コテ療治櫻の本へ呼んでくる

昔外科治療で、先年『柳檢研究』誌上、私は說明した事があつた、が今、梅園全集に因ると

（歸山錄）阿蘭陀には灸法なし、熨法有り、ノシ灸と云ふ、其の法燒酒一升、樟腦十二錢、木茴香紅花各四錢、一度に燒酒に浸し置き用ふる時布にて漉し用ふ、熨し樣は木綿手拭位のきれを疊み、右の藥水に浸し、『ノシガネ』は壁をぬる鏝の樣に、長さ五寸、厚さ三分程、さきを圓くし三枚火鉢の上にて燒き、きれの上を取り替へ取りかへ熨す、肌に熱を強く覺ゆればいい折傷死血積聚筋骨痛むに用ふ。

尙ほ『東北川柳』誌三卷六月號に、チクレキの事はかいた、風俗志には

藪醫者は竹の油が極意なり

青竹を燒くが夜伽の仕舞なり

氣の毒さ竹の油を藥にし

チクレキを取つてる顏に後家の相

と列むでる、句面では最後の事にのみなつて居る、私の喘息にも特効があるとして、勸めらるるまゝ試みた、のみよいものではなかつた、喘息患者は色々の手療治をやつてみるものである赤ン坊のカニ糞が良いと、古書にあるけれども、これ丈けは手一寸が出ぬ。

（六）老母の教訓

親からの貧乏くらしで、私は學校に送られた、それだのに餘り與奪に窮する樣な思ひをしなかつた感謝は、『貧しい』ことを一層有難く身に泌みるに至つた。此の體驗は私を平民的に非差別的に、又アキラメ的にした、上をみても下をみても、きりはない、各々の立脚に滿足する事が幸福な渡世だと、陋居をそのまま適當なものと、安住して居る、所謂履歷も肩書も皆無な

のは身輕だ、あつてもなくてもよい川柳の著書もしたくない、餘程前からこれ程の心境にはなつてゐるつもりであるが、衣服の上には儀禮關係もありはするが多少ヘンプクを飾り、好みに偏したりする氣味もなしとしなかつた、妻の母が木綿のボロ着物許りきて居らるゝので、タンスにしまつて置かれぬがよろしからうと、注意がましく言ふを。

『ソウ、死んで持つて行けるものでもなく、片身に貰ひ手もなからうから――』

と、わかつた返事なのに、ヤハリ相變らずボロをさげて居られる、私が段々年とつてきて、遂には老母のボロのチャン〳〵コなどを横取りして、平氣でにをり來客を迎える樣になつてしまつた、今はそを妻が氣にして、セメテ應接の時丈けはこいふがボロ着物が私の書斎生活にふさはしくてならぬのである、即ち老母の心情が漸く理解されきかつたので、決して物吝みするのではない、全く環境に即した歡喜　體接する眞實の表現なのである、濫りに老人のやることは笑へない。

老母が冷飯のあと始末をされる、『夫れは犬におやりになつてはいかが』と言へば、『ハイ〳〵』と、食べてしまつて、犬へは雪平でワザ〳〵たいてやられる、犬は温かい御飯よりは冷えたものの方が好いのであるのにと思ふ、そんな片々たる理窟を超越した、全愛の領域に達するには、私にもう十年以上の世間的修養がいるのであらうと内省する。

母と妻とボロ切れをつぐ世渡り　省二
朝飯前に犬と話する妻　同
生卵子のみ朝から易たてゐる　同

（七）四十から

柳雨翁が時々疑問として筆にせらるゝ例へば『すずめ』誌第三年九月號にも――

四十から老曾の森へ飛んで行き　（寶暦）

『此句武玉川二編にあるが、一體何事を云へるか不明である、老蘇の森は江州八幡の東北にある所名である、四十から、そろ〳〵老境に入るといふ事を四十雀にいひ掛けた句案には相違なけれど、唯夫れ丈けでは天保調にも滅多に出會はぬ程の大狂句である……武玉川にあるから狂句でないとは云ひ得ぬが……皆樣の御垂示を乞ふ』とあつて、其の次ぎには

雀屋に四十雀の古妾がゐ　（文政）

の句が列べてある、

これは武玉川中の作であるから　俳諧の用法を襲踏して、四十雀や老曾の森に、ヒッかけたのではなからうか。即ち古俳句を檢すれば

老の秋わたり初るや四十から　徳元
老の名のありとしらで四十から　はせを
色鳥もはしめの老や四十から　貞徳

老が悉く結ばれて居る、

世の中やわたりしらべて四十から　風虎
四十から鳥もまごはぬ山路哉　慶友

和歌も老蘇の森は老にかけて居る、

東路の思出にせん時鳥老蘇の森の夜半の一聲（後拾遺）

年へたる老蘇の森のした草につむこもわかなまじりやはせん（夫木）

謠曲に引用されて居るのもそうで、也有の物忘翁傳にもある松屋叢話にも、源平盛衰記四十四の卷に、重で百日行ひて九帳の袈裟に裏で、近江國まで歸る處に、又黑雲空より下り劍を取て東を指て行、道行取返さんこて追て行、近江國蒲生郡に大磯の森こ云處あり、追初の森也、道行劍を取返さんこて、此より追初ければなり、こ見えたけれこ、追初の義こせしは傅會の說にしうけがたし、此は湖水の邊なる地なれば、大磯の森こは號けるならべし、大磯こいへるよしは、相摸國の海邊にも同名の例あり、さて後に字を老蘇こ書き、歌にも老の義にもよみかけしなこは、於保伊會の保を省きて、於伊會こいひしより、うつれるわざになんありける。

因に四十雀はジジフこ鳴聲が聞ゆこいはれ、カラは山ガラ等に類する、其老ひたるもの毛を換えて、形大なるを五十雀こ呼ぶこ古人は片付けて居るけれこ、無論異なる、キマハリ、キメグリこ稱して樹木の周圍を回旋する性あるが五十雀である。

四十から小夜の中山五十から　其角
天命を知りてや籠に五十から　春情

川柳書架（卅八）

川柳と吉原

佐藤紫弦　著

左にその緒言の一部を轉載することこせう。

（前略）往昔の川柳にはこの遊里の風俗や情景を詠んだものが頗る多い、爲めに古川柳こ吉原こは切つても切り離すここの出來ない深い關係があつて、川柳を咀嚼玩味する上には是非こも吉原を研究しなければならないのである。（中略）本書に引例する句は重に川柳こして最も權威ある寶暦以後天明年間に於ける隆盛時代のものを標準こしたが、同時代に適當な句の見當らないものに限つて吉原を解說する上に多少江戸末期の句を掲記するこにした。大正十四年五月著者識、昭和二年五月十五日發行、菊半截二〇三頁、定價壹圓、東京市神田區表神保町一番地甲子出版社發行、著者佐藤紫弦氏は一時讀賣派の重鎭であつたが漸次作家こしてよりも研究の方へ傾むき本書はその研究の一端である句によつて吉原を簡明に說かれてある。

川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋が出來ました。左の價格でお頒ち致します。此用箋を御使用下さい。

百枚綴一冊　價金拾參錢（送料共）

◇御申込は本社事務所宛（一錢切手代用）

粒々集

○　東京　川村花菱

そのまゝに貸すユーカリの間柄
足袋ぬぐ足に見入るあほむけ

秋から春

秋の夜の人が働くガラス窓
蚊帳やめた朝がひろがる枕元
伊豫染のやうな女でくづをれる
只置くがあまりあぶない美くしさ
冬ざれの隣隣のあからさま
霜ごけの家をたづねる十二月
見せものに川五人歳末の人だかり
泣く肩にすべる羽織も姿なり
旅仕度心の窓に田舎道
ほたん櫻夕暮れをラッパの稽古
男が見たら女房はごう

○　松山　前田五健

紅梅へ欠伸を捨てる水車番
警戒をしたなと思ふ落目
不甲斐なさ今日も炬燵へ顎をのせ
給仕いつの間か救世軍の卒
つゝましさ耳の病の娘と知らず
燃ゆ盛る焚火突つ切り飛ぶ霰
喘ふのへ緊縮主義もまた笑ひ
新春の味はと問へば酒の息
紋附で紅屋の娘唄ふ春
錢が無いとも云へず生返事
つまらない競爭酒と意地がさせ

○　御影　長崎柳秀

兒の葬儀出した氣持の荷を送り
旅の身にしみ〴〵迫る軒の雨
出迎へに弟も見へ兄も見へ
大阪の繁華を笑ふ新歸朝
別府まで往くを女房に見送られ
夜遊びをやさしくさとす松の内
落ちぶれば案山子と見ゆん鳥の目に
もう港海が荒れよが荒れまいが

○　京城　正木柳健寺

別府海岸ニテ

朝つから酒にしろよと雨が降り

冷刀を悼む

麻生路郎

健康そのものゝやうな冷刀君が病氣をする、入院をする、そして永眠したといふ事は親しく身邊でみとりした者の外は信じられないといつてもいゝ位な出來事である。僕なぞは今でも『神戸から昨日こちらへ來てゐます』といふ賴りを受取りさうに思へてならない。病氣だと聞いても見舞にもゆけず、亡くなつたと聞いても告別式にもゆけない所にゐるので、こゝに一文を草して故人の靈を慰めたい。

◇

冷刀君は私と會つても、あまり多くを語らない男だつた。商人にしては言葉の寡ない方であつた。靜かに考へてゐると、幾度か會つた冷刀君の思ひ出が走馬燈のやうに私の頭腦に浮んで來る。鳴尾時代に宅で會つた事もあれば、兵庫まで會ひに行つて、歸鮮する冷刀君を神戸驛頭に見送つた事もある。道頓堀の赤い灯や青い灯をたづね、最後に二人で寫眞を撮つた事もある。鳴尾の宅の柳談會に出席して、朝鮮の風俗、人情から花柳界の話まで聞かせて呉れた事もある。其他幾度か會つたけれども、始めて會ふたのはいつ頃だつたかはつきりしない。紋太君の案内で鳴尾の宅へ來て呉れたのが始めではないかと思ふが、夢路君の話では、

『大阪日日新聞の川柳大會に出席されて居るからそれが初めではないですか』といふ事であつたが、或はさうかも知れない。其頃の切振帖が今見當らぬのではつきりした事は言へない。紋太君と鳴尾へ來てくれた時葭乃に『此方が仁川の右大臣君だ』といつたことを思ふと葭乃とは其時が初對面であつた。

私は人を紹介するのに、右大臣といふやうなえらい名の人を紹介した事がないので何だが妙な感じがした。それで話は雅號の事に移つた。

『君が右大臣だから、いゝやうなものの、土佐衛門だの、けちん坊だの、泥坊だのであると、一寸紹介するのに困るね。僕がこの方は泥坊君だと家内に紹介した時家内が今後よろしくといつて頭を下げてるなんか滑稽ではないか家内と泥坊と親しくされてはたまつたものではない』

と云つたのでみんなで笑ひ合つた事があるが それが冷刀君の頭に殘つてるたものか永年用ひてゐた雅號がいつの程にか冷刀に變つてしまつた。尤も右大臣といふ號は川柳に限つて用ひてゐたので、別號の冷刀、雨村のうちの冷刀を川柳に用ひるやうになつたのであ。

◇

冷刀君と最後に會つたのは昨年の一月十八日であつた。突然私の事務所に電話をして呉れて、南森町のリボン酒場で落ち合つた。それから堂島のバリジャンへ案内した。そこでは長い振袖の女が脊の高い男に抱かれてステップを踏んでゐた。二人は西洋煙草の煙りのゆれる中でウヰスキーを呑んだ。一時間程して夕暮の街へ出た。二人は大江橋のほこりで『それでは此處で失敬しやう、ぢやア又』

といつて毎日机を並べてゐる人が別れるやうな態度でフエアウエルをした。これが二人の永遠の別れであらうとは夢にも思はなかつた。

其晩冷刀君は『用があつたらしい私はその足で句會へ行つたやうに思ふ。先年亡くなつた松雨君とも酒を酌み交はして愉快に別れたが、冷刀君とも又かうして別れたのであつた。

『私達はいつでも、誰とでも、愉快に別

れなければならないと思ふ。たとへ其まゝになるやうな事があつてもいやな思ひ出は殘したくないと思つた。』と松雨君が亡くなつた時に書いてゐるが、其點からいふと、冷刀君と別れた時にもお互の心に何の蟠まりもなかつたといふ事はせめてもの喜びである。

◇

冷刀君姓は矢山、名は俊一、明治三十年五月二十九日神戸で生れた。生家は紋太君の近くださうである。仁川では豐田といふ店に務めてゐたが、其仕入れの關係でたびゝ内地への旅行をしてゐた。冷刀君の趣味は旅行、撞球、芝居（歌舞伎　であつたさうだが、それ等についてしみゞと話したり、行樂を共にしたりする時間に惠まれなかつた。嫌いなものは初めて泊つた宿の頭の高い女中と、金を貸して呉れない人だといふ事だつたが冷刀君の性格の半面がそこに窺はれて面白いと思ふ。

きびだんごこれ生きとし生ける道
なごを見てもわからう　深い省察がなければ生れない句である。

◇

冷刀君は大正七年井上劍花坊氏がはじめて渡鮮された頃に生れた作家である。其の後千流、大納言等の諸君と柳誌『南大門』に關係してゐたが『南大門』が七

◇

冷刀君は南人であつただけに金に關する句は特に巧であつた。

一萬圓位なか〳〵　儲からず
金庫開く音にかけとり心よし
人間味なごあらばこそ金が出來
出納課ものともせずに札をよみ
持つて死ねるか　とは陰口の辛辣さ

號を出したまゝ休刊の姿となつたので、大正十一年五月仁川に神仙爐川柳社を興し朝鮮柳壇のために氣を吐いてゐたが『南大門』が十月頃から復活するといふので同系統の柳誌が二つも出るといふ事は無意義であるとの主張のもとに二誌の合併をはかり十一年十月に『鷄林』を出した。この『鷄林』は『神仙爐』の六號と復活した『南大門』の八號とが合同して改題されたのである。『神仙爐』を出してゐた神仙爐川柳社は冷刀君の舊で仁川府花房町二の一に根據を置いて冷刀君がその署名人であつたが『鷄林』が出てからは朝鮮川柳と神仙爐川柳社の名を廢して鷄林川柳社となり、發行所が京城府大和町三の六に移つた。そしてその署名人は横山大納言君となつた。冷刀君は鷄林川柳社の幹事の一人として故入島弓八郎、寺田沈澱子、湯淺千流、横山大納言の諸君等と朝鮮柳壇のために大いにつくした。其『鷄林』も僅に三號で休刊の狀

態になつたのでその後仁川に仁川川柳社（仁川仲町一ノ八）を興し又新川柳壇のためにもつくしてゐた。大正十四年の一月から我が川柳雑誌社の同人となつて仁川支部のためにつくし、その後『川柳三昧』が横山巷頭子（大納言）君の手によつて刊行されるに至つて以前の關係もあるので南山吟社の同人を兼ねて今日に及んだのである。

◇

冷刀君は昭和五年一月十六日午前一時に仁川病院で永眠した。行年三十有四歳いよ〳〵これからといふ時であつた丈けに實に悼惜の外はない。牌名は釋俊明である。冷刀君の遺族としては嘉津子夫人と本年六歳の京子孃の二人である　思ふても淋しい。同情の涙が紙の上に漂ふ。

（寫眞説明。二十四歳の頃の冷刀君。嘉津子夫人と五歳の時の京子孃）

冷刀句抄

妓生の瞳に嘘は見へざりし

妓生の彩衣若葉へ光るなり

洗濯の鮮女の一人手が疲れ

帆柱の旗かたむきてジヤンク居る

鳥籠のいづれも無半に鳴いてゐる

醉ふてゐるのをおしまれる才がありストーブをかこみ戰爭あればよし

勝つといふ事辯護士できいて來る

寒うなる事を新聞書きつゞけ

風呂敷のぎれを借りてもしわがなし

靴直し日向で眠う縫うてゐる

繋がれてから米をこぐ舟世帶

絹刺まだ出來ずに春も過ぎんとす

喇叭卒砂塵位はものこせず

洗面所夜行が髪を持つて來る

釣道具去年の帽子あつたはず

孝行の終ひ近づくハハキトク

せめてもの事に信ずる氣を起せ

昆布食べて人なつかしく尼二人

一萬圓位なか〳〵儲からず

古本屋圓本と云ふ敵が出來

金庫開く音に掛取心よし

日本は米のなる木の中を汽車

人間味なさあらばこそ金が出來

百貨店その屋上へ子と父と

カラー汚れて掛け駘れたかたい椅子

一家みな無事清物も漬けられて

退院へ明るう門の東西屋

出納課ものこもせずに札を讀み

水捨てゝ豆腐屋輕く賣れて行き

給者板都へ來たを意識する

斷髪の手切金こもやう云はず

きちんと座れば丁稚膝が出る

轉寢は童心に歸へる日もありて

母性愛をあけるに躊躇せず

入院を丁稚したいと思ふなり

庭へ種蒔いたる事の雨もよし

夜學の道の藤が滿開

子の丈けを去年はかつた柱きず

無智を哀れみ飯をふるまふ

夜の美に假面を脱がぬ人々や

旅に居て古下駄に似る戀をする

渦を卷く波生活に似てるらし

持つて死ねるかとは陰口の辛辣さ

風のまにまに散つても見たく疲れてる

母の手の尊し節の高さにも

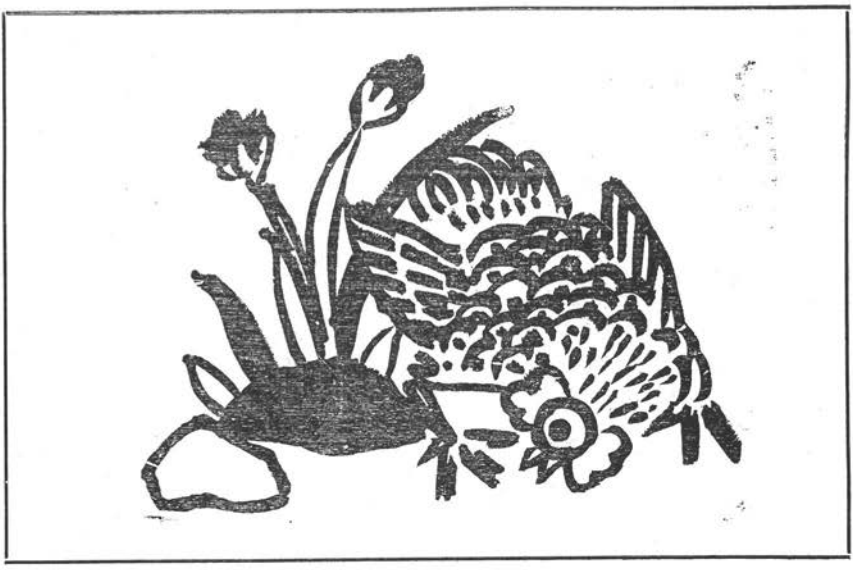
針箱の物を思へば夕近し

きびだんごこれも生きとし生ける道

指の白さに誘惑されたのさ

無能と云はれ叛むく氣の血をためる

寶石と夫人の價値を見較べる



灰色か

松丘町　二

灰色は悲しい。情熱なく品格なく、それは憂鬱の同意語でさへある。呪はれてあれ、灰いろよ。

私は松江で柳誌『なぎさ』を知つた。私の川柳に對する興味の眼を開き、それまで親しんでゐた短歌と長詩の世界を捨し、川柳への精進を決定して呉れたものは『なぎさ』であつたと云つていゝ。この意味に於て『なぎさ』は私の恩人であり、ひいては間接じはあるが、主宰者だつた可明氏は私の恩人である。（主義の前には氏へも弓をひくことがあらう。併し私交上の氣持に於ては變らぬ積りである）

そこで私は暇にまかせて句作した。同時に古川柳を讀み返した。古句に對する私の驚異は深かつた。そして現代作家の句と讀み比べては、更に古句に敬服した。畏怖さへした。併し私は馬車馬の如く句作を續けた。かくて三年。かうした型に箝つた句をいくら詠み重ねたところで、恐らく古句の上に出ることは難からう。傳統萬能のマンネリズムに陷つてゐて、いくら現代的觀力と力んだところで、

例へば吉原を待合や花街に、下女を女給に換へただけの相違ではあるまいか？そして是らの川柳とは要するに作爲や機智であつて、面白さうなことを考へ、面白さうに云ひこなせばいゝのであつて、作者自身の生活から句作するなどゝいふことは思ひもよらぬことである。――こゝに私の川柳に對する惱みが萌した。個性のないことも勿論慊らなかつたが、何よりその格調の低さが氣になつて仕方がなかつた。（恐らく川柳が未だに他の知詩と對等の取扱ひを受けないのは、これが大きい原因の一つであらう。川柳とは洗練された一行落語だと思つてゐる素人が多い）この頃から私の句は少し宛轉換を始めた。同時に一道の光明が、私の進むべき道をはつきりと照らして呉れた。その光の色は、白ぼけた光りでもなく、强烈な赤さでもないが、斷じて灰色ではなかつた。

その光とは！

いふまでもなく私が今、確たる主張を持つ川柳雜誌社に倚り、路郎師に導かれつゝあることを言へば足りる。

芭蕉が俳句の正道を確立して俳壇を風靡するに至るまでには、深く苦しみもしその作る所の句に依つてみても隨分暗中模索をしたことが窺へる。

當時の俳壇には、貞德の流を傳へる立圃、季吟らの所謂舊派と、檀林の名をして打つて出た宗因の一派とが、新旧對抗して競立つてゐる。所で彼芭蕉は傳統の幽靈たる舊派の遊戯的な句など作つてをれず、といつて徐り破壞的にすぎて、建設的な基礎のない檀林風に推服して仕舞ふわけにも行かなかつた。そこに當時の灰色作家芭蕉の惱みがあつた。然も彼は彼等貞德風と檀林風との外に、新しくて正しい俳諧の道があるといふことを確信してゐたのだ。俄然彼の句風は俳壇へ黎明の明るさを投じてきた。『古池や』の句を一轉機として、彼芭蕉の灰色は、輝かしくも白金色の光と變つた。彼を目して灰色となした衆愚は、彼等の無智と色盲さ加減を暴露しないわけにはゆかなかつた。

現柳壇は、右翼に慊らず極左翼に同じかねる我らを、前述の意味で灰色と呼ぶならば、我らは灰色作家であることを寧ろ誇りとしやう。

總ては時が審判し解決して呉れるだらうから。

川柳塔の人々

出口雨町

序幕

だらしなさにいつそ死なうか誰さしの

一見おごけたやうで、その實眞面目にして、鋭き自己判をした、こういふ表現

法にユモリストとしての路郎先生の全性格がピチ〳〵してゐる。まさにその聲咳に接してゐるやうだ。

毎號先生の句から我々はこの句に見る如き表現の新し味に多大のショックを受けてゐる。そしてお互に刺戟され勵まされながら歩一歩と進歩の段梯子を登りつゝあるのだ。しかしてこの事實は最近の川柳塔の質における又量に於ける著しき充實振りに見ることが出來る。次にそのフイルムの一部を展開しよう。

ひろし

氏は極めて寡辯の人であるが、而もその有するものは無盡藏だ。一言すれば即ちバーナアドショウの鋭さを以て迫る。したがつて又本誌の主義主張のためには君ほど多辯な人はないとも言へる。氏と論議しつゝ本誌の校正をしてゐると私はいつも愉快である。

あきらめがいけないのだたほすのだ

潮鳴る階級性に呼びかけん

その作品の上には社會思想家としての彼が多分に出てゐる。文學に階級性を要求し、川柳も亦正しきプロレタリアート意識から製作されねばならぬと言ふのが氏の熱烈なる主張である。

町二と杏三

最近私は町二君の句がいつそう好きになつてきた。極めておとなしい表現のやうであつて實は何か大きな強いものを摑んでゐる。彼の句に出てゐる生活そのまゝの心境の前に私は靜かに襟を正す。

病人の耳を見てゐてなかしくなれり

元日も雞は稼いでくれました

あとの句からは路郎先生の『その日ぐらしも軒に雀がこぼるゝよ』に似た、さゝやかな生活の歡喜がうかゞはれる。一千萬圓持つてゐても井上藏相は決して幸福ではない。大きいものに縋らうとはせないで、小さな生活をそのまゝエンジョイしてゆく所に彼町二君の尊さがある。

正しく生きようとすれば、しひたげられる。これは私の體驗から得た公理であるが、少くとも資本主義社會に於ては眞理だと思ふ。そしてかういふしひたげられた境地を最もうまく句の上に活かしてゆく人に杏三君がある。

逆とんぼうつて社長を出迎へる

馬妾月給取と溝鼠

『氣さらない』『自己をあざむかない』實にこれが町二、杏三の句をして二讀三讀させるのではなからうか。

亂耽と愚陀

傳統川柳の技巧が一つのマンネリズムに墮してゐるのに反して、亂耽君は逐一新しい技巧を創造してゆく。彼がかつての論文中に述べてゐる如く『戀愛ビジネス、アルコール、電流の交錯等々……』の中に、スピーディそのものゝ如き近代都市の中に、彼の烱眼は恒に光る。

ネビーカットの罐に潜んでゐた彼女

ガソリンの業火に街のあをざめて

煙突の下に眼ばかりうごめくよ

又一方我々若人を魅了せずにはをかぬ感覺的手法は實に愚陀君獨特の舞臺である。

別れともない秋の赤さよ

脚のまじゆつに醉ひ痴れて出る

こうして亂耽、愚陀兩君に共通してゐるものは『若さ』であり『モダニズム』である。而してやゝ前者はリアリストとして、後者はロマンテイストとして、より多くの傾向を示してゐると私は思ふ。

鮎美と石竹

こゝに都會の雜音やイズムの洪水をよそに靜かに自己を内省してゆく作家として鮎美君を擧げることが出來る。

落椿からだもらくになりたれば
さまゞくの姿の中にうつむけり
片戀か知らんと空を眺めゐる

これらの句は彼の主觀であると共に、又淋しい人生の縮圖でもある。こゝして機械文明の眼まぐるしい回轉には無關心に、こつ〳〵とその獨自の作品を展開してゆくこころは石竹君とも非常によく似てゐる。ここに石竹君は素朴な田園誌を多くものする。そして、そこでは大底、容觀的でなく主觀的でもなく、自然に同化しきつてゐる。

蟻がおじぎしたエッサ〳〵續く

この句に見る技巧の妙は石竹君をおいて他に求めることは出來ない。人としての彼、詩人としての彼に、時代から超然とした素朴さ、偉大さを我々はいつもうかゞひ得る。

大詰

私はまだ〳〵他の作家についても書きたいのであるが、紙面はもうそを許さぬ。しかしながら、以上で極めて大ざつぱな批評ではあるが、我がグループの人々が皆こゝ〳〵に獨自の生活　思忽及び個性を發揮してゐることがよくわかると思ふ。こゝは一つに路郎先生が不世出の名選者であるからだと我々は信じて欣快にたえない。しかもこうして、各々異つたカラーの裡にも、本誌の主張してやまぬ功利主義が一貫してゐる。卽ち川柳は何等かの意味に於いて、人生に、生活に役立つものでなくてはならぬといふことで、云ふまでもなく生活ゝ基調として我々の句が、我々の生活に何ものかを寄與し　生活を深化し、リードすることは當然すぎる程當然なことである。このことは近作柳樽に對しても勿論言ひ得る。かくして、我々生活派の川柳は不斷の進展を遂げつゝある。亦快ならずや。

（五・一・二七）

松山より

岩本素人

松山媛柳吟社の請ひを容れて、老松町の溪花莊文庫を大トランクに詰め込んで大阪から溪花坊氏、大阪媛柳吟社の鷄牛子、梅風の二氏とがぢつこいしよとやつてこられた。

九日に伊豫新報社の樓上で、文庫の展

觀、午後が講演、夜が川柳句ッて言ふプランで盛んな催しがあつた。折惡しく雨が降つて寒い日ではあつたが、此種の催しは初めての事ではあり、川柳家以外の趣味家・高等學校あたりの教授、學生諸君の熱心な參觀・來聽者が相當あつて一般に可成りのショックを與へた事と思ふ川柳の社會進出の上にも大きな役目を果した事でゞらう（詳細は三味線早誌上に掲載されるであらうから茲には書かない）昨年の秋は吾社の路郎主幹と琴人君が見へ松山柳壇に好い刺戟を與へられ今又此事のあるは松山在住川柳家の一人として感謝に堪へない次第である。

斯くして松山の川柳界も愈々本舞臺に入つたかの感がある。

本社の松山當支部設置以來早今日で丁度滿一ケ年になる。昨年の紀元節、あの時は本社員として主幹、二柳子（今の綠雨）君と共に支部創立句會の末席を穢した僕が、一年の後には松山在住の川柳家として主人側の端役の一つを受持たうとは人の世の遷り變り思へば感慨無量じあるあの日も寒かつた。選句の披講に齒の根が合はずがたゞ〳〵震いで聲が出なかつたのも思ひ出の一つである。今朝は少し雪が降つた。常の日の雪と違つて懐しい寒さである。

紀元節神代ながらの雪が降り

記念すべき今日、紀元節を下して盛んな支部創立一周年記念句會を催すつもりであつたが、前述した媛吟の催しがあつた直後にはなるし　又目下總選擧で人の氣も落付かない時則でもあり　旁三月上中旬の頃本社からもどなたか來て貰つて温泉の樓上で道後の湯に浸りながら、のんびりとした春らしい記念句會をやりたいと思ふ。どうか全國から川柳家のお集まりになる事を希つて置きます。

支部創立句會の時に集まられた四十幾人の松山川柳家の内で顔を見せて呉れなくなつた人が少くない。其代り新しい作家の顔が例會毎に盛んに殖へて來る事はそれ丈け川柳が新しい領域を開拓しつゝあゝ證左であると思へば喜びに堪へないが、矢張り古い顔の消へてゆくのは誠に心細い。

當地三大新聞の一つ伊豫新報の西山編輯長は鐵傘樓の號で久良岐門下の古い川柳家で明治三十七年に發行された『川柳五月鯉』の發行人であつたと言ふ大先輩である。斯ふ言ふ不審議で有難い因緣から今回の溪花坊氏の催しに就ても同紙が非常な力瘤を入れてくれ只さへ忙がしい總選擧の眞只中で紙上に會場に實に到れり盡せりの後援振りであつた。我松山川柳界にとつて鐵傘樓主筆の伊豫新報に居られる事は海南新聞社主筆の石井冕氏が麻生路郎主幹の親友である事と共に大きな力である。

昨日夕刻から五健君の案内で、溪氏一行、玄々子君と共に伊豫鐵電氣會社の社長井上要氏の高濱不去庵へお邪魔をした井上社長のお話の中に『松山は昔から有名な俳人の住んで居つた所で、彼の一茶なども態々松山まで句行脚に來たと云ふ

事です。しかし子規の力は偉大なものです。だが松山の川柳界今日の盛大を來らしめたのは前田君の力です」と嬉しさう（前田九健君は伊豫鐵電社員）井上さんの言葉には間違ひはない　五健君の川柳に對する熱と努力は實に涙ぐましいものがある。しかし五健君は好い親分を持つたものであると僕はつくづく思つた。川柳に相當の理解と同情を有ち、五健君の運動を直接、間接に助けて居る人に伊豫鐵王國の井上さんが在るのである。五健君を助けて呉れる井上さん。こりも直さず松山柳壇の隱の大きな力なのである。

（昭和五、紀元節）

難解の句

櫻井圓角

今年の元旦は麗かな日和に惠まれて吾々川柳黨には昭和五年の川柳行進曲の甘美な序曲を聽くの思ひで過す事が出來た所が作つてみるとトント川柳が出來ない新聞や雜誌に掲載される俳句等も大家のもので隨分難解の傾向のあるのに氣附いて居たのであるが、御旅支部の新年會に臨席された路郎師にこの點に就いて具さに說明されたのを聞き其妙味を反覆味あふて居るものであるが自分獨り味あふだけでは物足らず記して諸兄と共に味はひ度いと思ふ。その時、路郎師のお話に『同じ位の子でも音樂に對する耳が違ふやうなものだ。私のうちで一人田舍で育てた子があるが學校で歌を習つても半音を感じない、都會で育つた他の子供たちはよく半音を入れて唱ふ。だから川柳でも研究の淺い者には大家の作になゝリズミカルな句、深みのある句を讀んでも作品そのものがもつ內容を充分うけ容れることが出來ないので往々解しかねるのであると。又三味線をひくにも、同じ塲所で絃を押えて居るのに、甲の押へ方では妙音が出、乙の押へ方では妙音が出ぬその押へ方は口では言ひ表せぬ微妙なにあるので銘々工風研究して會得するより仕方がないのである。同樣の事が俳句や川柳に於ても云へる　卽ち熟練と工風の結果美妙なる韻律を以て迫り來る川柳味を表現し、或は感得する事は人の川柳境の階段々々で差異が生ずる。老人家の一品に籠る妙趣を解するには　觀賞者にもそれだけの境の進んだ所がなくてはよく感泥はぬ所である。一般的に誰にでもよく解る句で優れた句の出來ることは望ましい事であるが又ある塲合にはせめて觀賞眼の進んだ人々だけにでも解つて貰ひたいと云ふ心境の句や詠む塲合もあるので、解り難い句だから良いの惡いの、解り易い句だから良いの惡いのと云ふことは當らぬ譯である』と。眞に味はふべき言葉だと思つた。

一路集

（募集句）

影

安井ひろし

主義者いま影の迫つたことを知り　大夢子
陽の影に朝寢度肌を決めてゐる　芦穂
出戻りの簞笥淋しい影をひき　光路
高々と石塔の影泣いてゐる　キヨシ
案山子でもやつぱり影を持つてゐる　桃源
動く影猫眞劍に盗み足　麓生
金魚は金魚だけの影を持ち　英賀夫
とゆつたふ雀障子に影落し　籬楓
梅の影はつきり春を見せて居る　不朽
畑打の影面白う腹が減り　多聞
雪の山襞から夕が迫り　湖山
雪雲の影寒々と野にゆれる　喜天
山すそへ鮮婦の白衣影うすく　救命
支那街のふいに大きな影に會ひ　狂雨
辻占屋障子の影へ聲を張り　柳兒
町の灯に人間の影うばはせて　勝二
街灯の其處から影に追ひ越され　光哉

赤い灯がグラスの影にわなゝく夜　濱郎
蠟燭の灯影も春の宵なれや　太路
アスファルト都會の影が入亂れ　沐天
建物の形のまゝに曲る影　定胤
ビルヂング大きな影を道に投げ　鯉友
洋館の影に哀れな水溜り　憲太
別莊の影が晝寢の犬へ伸び　嘉月
倉の影ぼんやり冬といふ日ざし　清路
干物へ大影の影の迫り來る　青水
放課後のお庭へ長い木の影　碧水
椽先きの日影へ爪を切つて居る　桂枝
影にまで戀感じゐるフアン　野渡
思ひ出の松の木影にさゝやく　鶴峯
カーテンの影に躍らす戀心　青兒
硝子越し向きあふ影へ戯れる　湖舟
街路樹の影に細長うなつて待ち　突支坊
影へ來て女はそつとふり返り　今雨

杭全町 MEMO

緑雨

◇松山支部では三月十六日支部創立一週年念記句會を催されます。本社から安井ひろし君外一二名出席することになつてゐます。

◇濱支部では昨秋から一時支部句會を休會されてゐましたが今後益々活躍される旨幹事谷村稔君から通知がありました大いに精進されんことを望みます。

◇須崎豆秋君は昨年から川柳尖鋭會を創立して大いに柳會のため盡してゐられましたが今回本社の社友となられ三月上旬天王寺支部の發會式開催されることになりました。

◇同人水谷鮎美君は二月三日目出度結婚式を擧げられ當夜新郎新婦が阪神國道をドライブして有馬溫泉へ入湯に行かれました「宿の朝あまりに山がちかすぎる」の句を寄せて梅田支部の人々や同人をうらやましがらせてゐます。

◇同人岩崎柳路君は滿洲長春方面へ旅行されてゐます。近く東京を引揚げて大阪へ在住するとの便りを受けました。

◇道田葉平君は一月卅一日長女不二さんを擧げられて喜んでゐられます。

影と影重なりあふて闇に消ゆ　玄々子
人影に笑顔と笑顔振けて行き　山月
靴音の別れゆく影　菊路
岸に立つ二人の影の縺れ合ひ　仙人掌
さしも戀悲し素燒の壷の影　十三絃堂
正月の障子へ裸竿の影　同
佗しさは枕の影に　たけし
逢ふた夜の盃の影　同
書急ぐペンにまつはる夜の影　町二
木枯の我影ばかり味方なり　同
我影をボンヤリ見て据る病上り　丁路郎
長く病み此身の影をうすく見る　松露
一人ッ子自分の影と話して居　大黄
人の影ばかり踏んでて埋れ居る　陽平
我影に思案ひよつこり行つまり　竹雪
わが影へ大きく欠伸して見せる　麥魚
わが影をふまへて脊伸びする春　佳水
月冴へて影が伸びゆく　幻草
月影におびやかさるる野道　樹光
影踏んで歸る夜道の凍てゝ居る　公二
我が影を寒さ段々遠ざかり　花蝶
月を背にして已のかげ淋し　八歩
我が影に追つめられて居る疲れ　衣童子
影にふと思の暗くなるを知り　青笛
あてどなき歩みに影のついてくる　山茶花
ついて來るものは自分の影ばかり　不然
影に迄我が貧しさのうつるなり　紫電
影法師惱みのまゝにゆれるなり　耕民
淺ましい心自分の影にをぢ　市公

(佳)已が影をふんで砂地を歩く　風來坊
(同)誘惑に勝てさびしい影を踏み　悲絹志
(同)いとまして外に出づれば影長し　さだを

選後に……選句の配列順序は優劣を意味しないなるべく同想のものを集めて發表した。かなり勇敢に添作をしたが、作者の表現せんとするものをより完全に表現することに努めたから、もし意に滿たぬところがあれば、私迄御照會(返信料を附し)下されば詳しく申し上げる。一々選評を附して御參考に資したいのだが紙面の都合で省いておく。

……ひろし生……

雀

愛らしき仔雀となる　幼稚園　桂枝
雀等の冬は淋しく軒で鳴き　一念坊
人は居ぬ飛んで御覽と親雀　山茶花
竹藪へ來れば雀のほつとする　用心坊
雀まで灰色になる工場町　可章
倉の屋根戀の雀は落ちかゝり　公二

太田朝陽選

拜殿に雀平氣な米を喰ひ　喜天
止り木へきつちり竝ぶ紅雀　麥魚
愛らしく稻穗へ雀たわむれる　山月
愛の巣の雀じやけんな人にあい　嘉月
戀心今朝の雀に笑はれて　市公
一匹が飛べば雀はみんな飛び　青柿

◇熊本黄蛾君が社友となられて平野支部を設け柳界の爲め努力される事になりました。
◇社友越田久水君は高岡新報社の後援で二月十一日午后一時高岡市坂下町西萬寺に於て高岡川柳會を催されました。
◇同人安井ひろし君の夫人欣女さんは病氣で一時四十度以上の熱だったさうですが、數日前からよほどよろしく、近日全快の事と存じます。
◇同人川合舟々社友島田翠峰、和田源坊、六角桂風、兼重白鷗の五君が家事の都合で今回退社されることになりました。再び復活されんことを期待してゐます。
◇同人太田朝陽君の家庭では一月十七日に四女澄江さんを擧げられましたが喜ぶ間もなく二月十二日急性肺炎にて永眠されました。哀悼を表します。
◇本社の主催で二月十五日夜矢田冷刀君の追悼句會を催しましたが、私は勤務のため出席することが出來ず實に遺憾でした。
◇田邊苔香瓏、石田沐天の二君は三月號編輯日に事務所を訪れられた。
◇本號の編輯は路郎主幹、ひろし、琴人、雨町町二、柳影、公二の諸君と私とで致しました。

移轉

吉田清氏は大阪市東成區勝山通五丁目五八五一へ▲牧田普門氏は福井縣坂井郡坪井村北野城戸久藏方へ▲大山露斗氏は大阪市東成區鶴橋北ノ町佐々木秀吉方へ▲加納嘉月氏は大阪市北區東野田町四ノ九へ▲長尾青蛙氏は鳥取市大榎町一八小松方▲島田翠峯

病人がはつきり覺めた朝の雀　町二
朗かに朝を唄ひに雀くる　沐天
神殿の朝の雀は園う見わたけし　太路
お茶所までおりた雀へ霰る　四方路
童謠にされて雀は親しまれ　碧水
一口の嵩燒鳥にした雀　狸風
休日の欠伸に雀飛んで行き　竹雪
一羽二羽雀の戀へ夕燒ける　救命
雀今日動物園の餌に暮る　桃源
今の鳴子風とは知らず雀飛び　鯉友
稻雀追へば分家の田を荒し　鶴峰
散彈に雀の一羽舞ひ落ちる　文芳
馴らされた雀座敷へ放される　清路
病む雀結局籠の中で死に　菊路
電線に雀ずらりと腹を見せ　義人
食つてゐる雀は恐い音をきく　青蛙
生きんための雀も矢張り苦勞して　空山
騷がしい雀來ぬ日を淋しがり　芦穗

佳句

人間の粗末を雀見逃がさず　光路
まだ拾ひ足らぬ雀へ暮かゝり　陽平
紅雀可愛がられて籠で死に　佳水
緊縮の春を雀のまんまろし　八歩
子雀になりたい親のない子供　十三絃堂
野良へ行く人へ雀も稼ぎに出　風來坊
豐年の波へ雀の飛び違る　青心
食い飽いた雀は屋根の陽にあたり　紫電
雀今日豫告もなくに追出され　湖山
此の家を信じて雀子を育て　さだを
(人)雀のお宿もう輕い寢息なり　竹雪
(地)夜の火事雀の夢をおごろかし　キヨシ
(天)荒れる豫感だ雀等の沈默　朝陽
(軸)温室の窓へ雀のよく喋り　

家鴨

亂耽選

日曜の朝をうるさく家鴨なき　吐句坊
逃げのびる躍氣を家鴨尻に見せ　柳兒
水音に家鴨今來た方へ向き　用心坊
惡戯と知らず家鴨が寄つて來る　市公
家鴨追ふ妻の背なかへさす夕陽　青兒
その中の家鴨泳げば皆動き　喜天
魚釣へ家鴨は邪魔な列で來る　碧水
冬の陽へ家鴨懶い口を開け　仙人掌
雲の峯に向つて家鴨氣が變り　多聞

住田　亂耽
朝田　新水　共選

冬の川家鴨が去つて灯を沈め　町二
氣の勝た家鴨へ家鴨ついて行き　光路

一路集點

虐待をされても家鴨それでよし　竹雪
泥々になつてあひるのつゝがなし　清路
水にゐるときの家鴨のまじやう　陽平
生てゐる泥鰌を家鴨もてあまし　麥魚
風に吹きよせられてあひる啼き　町二
驚きの首を家鴨は高くあげ　芦穗
盜られてもいゝかのやに家鴨かひ　四方路

氏は大和龍田町字五百井へ▲廣瀨無鬼氏は大阪市中川町五〇〇森本方へ▲寺田五柳子氏は朝鮮櫻井町二丁目一八一へ▲金泉萬樂氏は尼崎市西本町北通二ノ五六に町名變更

改號

横田眠聲氏は方眠、花岡孤愁氏は秋壺、寺田沈瀑子氏は五柳子と改號されました。

訂正

二月號の伊藤愚陀者川柳塔の中に「母に獻ず」三句とあるは二句の誤り
二月號四十七頁「角帶」の選句の中に籬風とあるは籬楓の誤り

新誌友

(五年二月十六日まで)

「川柳雜誌」前金半年分壹圓八拾錢以上拂込みの讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します。何卒此際新讀者を御勸誘下される樣お願ひ申します。御紹介下される方には「川柳雜誌」の近刊を見本として差上ますから御申込下さい。(綠雨)

内藤業太郎(長崎柳秀)熊谷勘一(中見光路)宮村柳月坊(橋本綠雨)福岡不忘、一柳憲之助土肥好次、大坪支配人、宮城啞亭、菅野眞湛、富士野鞍馬、宮本富太郎、高見柳骨、長崎柳秀中野由貴夫、中山恒男、鹽田素萠、和田源坊三條東洋鬼、押鐘柳南、佐々木三福、入江熊男、丸一薫(本社事務所)括弧内は紹介者

歸省してあひるに餌をやつてゐる　たけし

三　光

家鴨日に惱ましくなる水温み　光路
一列になつた家鴨へ霧が晴れ　沐天
よつぼごの因果に家鴨生れたり　多聞

◇　新　水　選

我が家へ〻家鴨てく〳〵追はれて來　嘉月
その羽根の弱さを家鴨水に浮き　今雨
强訴するやうに家鴨のわめき立て　勝二
驚いた家鴨の列が逆轉し　登美坊
佇めばあひるは寄つて來て吳れる　たけし
まづ波紋切つて悠々往く家鴨　青兒
何か食ふ家鴨の首は長くなり　文芳
泥々になつて家鴨のつゝがなし　清路
水の中器用に戀をする家鴨　キヨシ
逃げのびる躍氣さ家鴨尻に見せ　柳兒
水音に家鴨今來た方へ向き　用心坊
あひる四羽五羽堤も春だ　紫電
家鴨今日水の旱さの河岸に立ち　沐天
朝靄の中に家鴨のかしましさ　與詩大
首つりのかたで家鴨は數へられ　大黃
其中の家鴨泳げば皆動き　喜天
寒風に吹き殘されて家鴨浮き　民藏
盜られてもいゝかの樣に家鴨飼　四方路
菜を洗ふ河岸へ家鴨は友を呼ぶ　青水
ごう見ても家鴨不器用な歩きぶり　麥魚
家鴨へも指さして子を歩かせる　市公
滿面の家鴨は陸へ上つて來　桃源
霜のある渡舟の邊を家鴨浮き　雪峰
刈田から刈田へ家鴨よく肥り　公二
姿〻は別に家鴨の愛されて　光路
放たれた家鴨河へ〻小走りて　狂雨
影永ふ家鴨は鳥屋へ追ひ込まれ　太路
番犬〻仲善く家鴨寢てるなり　桂一
賣上を數へて家鴨飼ふてゐる　吐句坊
超然〻瀨をさかのぼる家鴨の子　山茶花
駈切れぬトコは家鴨の聲を擧げ　多聞
牛を見てからの家鴨は水に入り　同
餌をあさる家鴨へ雪の野が開け　碧水
魚釣へ家鴨は邪魔な列で來る　同
鳥屋近く家鴨へ響く暮の鐘　竹雪
心せく家鴨に足がはかどらず　同
噴水のしぶきに家鴨凉しそう　芦穗
水明の鄙の家鴨は寫されて　同
篠竹の園ひも寒う家鴨飼ひ　十三紘堂
家鴨悠々壕の水蒼し　同
もぐり疲れて家鴨の羽づくろひ　町二
夕風白し家鴨の水輪　同
鷄へ家鴨もぐつて見せるなり　同

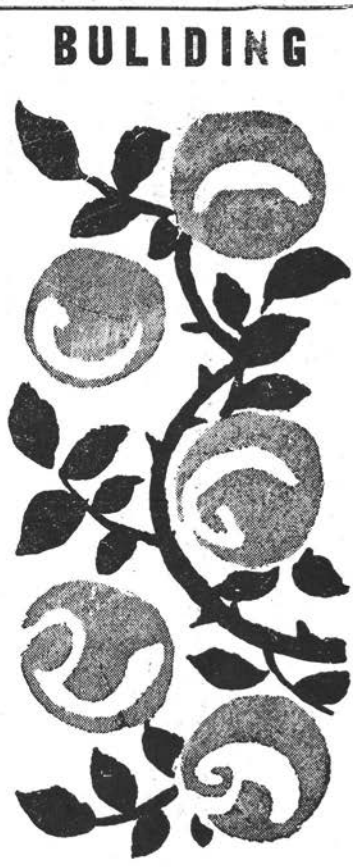
佳　句

一本の竿に家鴨の群れは行き　突支坊
泣聲のごれども見わず家鴨行く　風來坊
驚きの首を家鴨は高くあげ　芦穗
うそ寒く家鴨締めてる人を見る　一二
家鴨首延ばして世間見るつもり　光路

カナメ喫茶店

心ブラにお出での節は是非お立寄を
緊縮時代に最も適合した
カナメ喫茶店へ
柳人は特に歡迎いたします、

南區櫻屋町周防町
東入南側
カナメ喫茶店
柳人
永田里十九經營



て了つてしまつたのである。

× ×

愛には絶對に飽和性がない。佛陀の慈悲はよく禽獸草木にまで及び、クキリストは全人類を愛しても愛しても尚愛しきれなかつたそうだ。

× ×

どこまでも愛せよ、どこまでも信ぜよ愛して裏切られても赦さねばならない。信じて瞞されても後悔してはならない。

× ×

怒れる時の心持は恰かも暴風に見舞はれた大海の如く、これに反して赦した心持は波おだやかな大洋のそれにも等しい愛する心は底の知れぬ歡喜であり、赦す心は最も大きな勝利である。

× ×

自然の風物も人の物も一先づ自分のものと思へ。そして自分の物の如く愛せよこれは共産思想ではない。愛の强調である。

× ×

人の幸福を犧牲にしたり、自由意志を束縛することを私は何よりも恐れる。だから私は徹底的廢娼論者だ。一部の女性を殺してまで我々は生きたくはない。骨肉相食む源氏より共に「壇の浦」への平家でありたい。人類は皆一族である。

黴と薄口

若井たけし

媚態を示された青年はまだ醉つてはゐなかつた。

「おい、いゝかげんにしておかないと、金ちやんが怒るぜ」

「ほゝう、あんなもの今頃黴が生えてるわ」

そこで青年は、自分にも、また、いつか、黴の生える日の來るであらうことを怖れた。

× ×

雲つた日の納戸から母と醬油屋との會話が聞える。

「まるてんよりもう、うすくちは有りませんか」

うすくち！

私はふと、醬油と人間とを入れ替へて見て苦笑した。（五・二・七）

初春のモノローグ

出口雨町

その昔「ナ國は近づけり、人々よ悔ゐ改めよ」とイエスは叫んだ。しかし人類は依然その罪を省りみることなく、こゝに一三九〇年の齡を重ねるに至つた。そしてイエスの「天國」は遂に彼の夢とし

×　×

時計の針が一分動く間にも、どこかでは愛し合はない者の結婚が強ひられてゐる。更にどつかでは愛し合ふ者の結婚が沮止されてゐる。これは想像してみても恐ろしいことだ。しかもこうして若き男女が精神的に殺すところの犯人に對しては法律は極めて無關心だ。

×　×

今この瞬間私は非常に幸福である。先づ第一に飯がうまい。私は病人ではないのだ。それから酒があり女がある。更に結婚といふ大きな憧憬がある。更に〳〵川柳があり文學があり音樂がある。私はこの歡こびを感謝したい。祖先にか？否國家にか？否々私はこの感謝の對象としての神を認識する。

×　×

人間に忘れるといふことがなかつたら恐らく一日だつて生きてゐられないだらう。卽ち過去の悲しみの集積は遂に人をして悶死せしめるであらうから。我々は時に過去の悲しみを思ひ出さうとする心と、それを忘れやうと勉める心との葛藤に苦しむことがある。

×　×

世界の談話王ダグラス夫妻が來朝してファンの殺倒的歡迎を受けてゐるこの日この時、恰かも我が軍縮全權若槻氏はかの白亞館に於いて、米大統領と堅い握手を交はしたと云ふ。

「おゝ、世界は遂に調和した。人心の惡の根が斷滅した。そして向後の人類史からは戰爭といふ文字が永久に姿を消すであらう……」と私は言ひたいが、あゝ軍人の失業する日は果して何時か？

×　×

最近出版された鶴見祐輔の「母」が一般讀書階級に壓倒的人氣を呼んでゐる。云ふまでもなく、これは一般讀書階級の大部分がまだ〳〵低級であることの有力なる證據である。そして尙はぢることもなくこれがフイルムにまでなつた。監督と技師と、更に多くの俳優とが「母」のために動いた。何たる愚劣さぞ。今日社會進出を叫ばねばならぬのはひとり我川柳のみではないのだ。

×　×

議會政治は云ふまでもなく多數政治である。しかし數のみによつては政治といへども決して動くものではない。私は今少し「多數」といふものを味はう。古い話ではあるが、大戰前の獨逸の强大さを築いたのは多數國民よりも一個のニーチエといふ思想的背景があつたからだ。又――歷史の發展過程に於いても、常に源頼政の血が附隨してゐることを我々は認めねばならぬ。力といふものは統制なき多數よりも常に特殊なる個人によつて釀されてゐるのである。鶴見の「母」が持つ盲目的なる多數はむしろ私のとらない處だ。

ここに政治と藝術とは全然區別されねばならぬ。かく言ふは「番傘」二月號に於けるあまりにも愚劣なる卷頭言に對する應急手當でもある。

×　×

創作のない處に批評がないのと同じやうに、批評のない處には決して次の創作はあり得ない。既成川柳家の凡べてが、何時までも同じやうな句ばかり吐いてゐて、そこに少しも進歩を見せてゐない所以もこれによつて說明することが出來る。彼等は批評を二義的にも三義的にも考へてゐるのだ。一体批評なくして正しき鑑賞が出來るものではない。一つの芝居を見ても、只「面白かつた」「悲しかつた」だけでは何にもならないではないか。

×　×

論ずるまでもなく文藝は遊技ではない。文藝は我々が、よりよき生活を營む上に役立つものでなくてはならぬ。この意味に於いて、我々の川柳は確かにわが人間生活を美化し深化する上に大いに役立つてくれる。こゝに言ふ生活を說明するために、ワイルドの有名な言葉を引用して置こう。

「生活するといふことは此の世に於いて稀有のことである。大抵の人は生存してゐる。そしてこれがすべてゞある」と。

時代の人々

伊藤緑之助

A

資本主義文明を謳歌した句に出會ふことは決してまれでない。そして極端に讃美してゐる場合をよく見る。意識的か無意識的かは知らない。

○○人と知らず貴夫人道を聞き

こんな句にぶつかつたことがある。こんな句を作るから日本が世界的になれない。やはり論の國日本なんだ。いはゆる川柳家達が極めて感興的に作り放して何ら苛責を感じないと思へば心細いかぎりだ。

波のまにまに流れゆく忠實なる人々である。

B

ふとしたことから村の人々が憤慨した有力な立場にある、比較的智識階級の人々であつた。童話劇の浮薄を貶し、童話も近頃のものでは決してよき影響を與へないとこき下し、論鋒はキネマに及び、現代青年のだらしなさと結びつけて痛論盡くるなし。

「あんなもののどこが面白いのか、近頃の若い者は氣が知れぬ」と、檢閲の緩慢を責め遂に亡國的であると結ぶ。

これらにも一理あることを頷かねばならぬが、次のやうな皮肉が僕の口からひよつこり飛び出してしまつた。

「何處が面白いかつて、その面白さがわかつたら、貴方がたの言ふことが意味をなさなくなる……」

C

日本の政黨史を繙くとき、がんめいそのものだと思つてゐた。いはゆる元老級の人々でさへ、明治の政界に如何に情熱を以て君臨してゐたことか。當時彼等が如何に急進的であつたか。

おもむろに、千九百三十年をみわたせば轉た感慨深いものがある。

D

時代はうつりゆく。

僕若し長命を保ち得るならば、極めて厄介なお爺さんになることだらう。

…一九三〇・一・一…

あゝ柳人冷刀

桑原京郎

冷刀氏の訃報！ポキリと一本齒が抜けたうら淋しさである。こんな感じのするのも

入院を一種したいと思ふなり

右大臣氏時代であつたかと思ふけれど、この句の記憶がある限りこの句の作者である氏を僕は忘れられないのである。

この句は氏の屈指の佳句でないかも知れぬが（こんな批評がましいことを書くのは潛越な樣だが氏の作品を云々するのではないから）と云ふのは、氏には他に澤山の創作句があるけれども、氏に就て僕の印象することはこの句を通じての氏だからである。

氏の靈がもしこの一文を見られるならばキツト「俺の創作にはもつと他に佳句が澤山こしらへてあるぜ」と云はれさうに思ふ。

八相兼瑞それはムツソリーニだが寒村の驛長見たいに、おさんから小僧から手代からと云ふ工合に一人でゝリ〳〵舞してゐる時、入院せねばならん病人が來てその昏迷の極神衰をやつたが、病院へ荷を運んだり見舞に行つたりしてゐる中に兼職？の忙しさを逃れる唯一の場所

は病だつた。快方に向つた病人を對手に僕はいつも嘆息の樣に一層入院して。二三週間サボリたいなと何度云つたことやら……

その時からこの句を切實に思ふ樣になつたのである。勿論その事件が單調な駄馬的生活の一ボツクとして僕の人生史に活氣あらしめたからでもある。この記憶の存續する限り僕は冷刀氏を忘れられない。

あゝ柳人矢田冷刀氏よ！

君が天職は幾春秋を餘したりき。

いさゝか僕の哀悼のまことをいたしたくこゝに拙文を捧ぐ。

冷刀氏よ！だが僕は思ひますそこが永遠の絶對境じやないでせうか？。（二九五〇・二・五）

玄海から

正木柳建寺

私は今昌慶丸に乘つて玄海を走つて居る。壹岐對島は遙に後になつて福岡邊の山が見ゐだしたので眼を眺らして居る處です。私の此旅行は豐前の中津にある祖先展墓の爲めである。下關で赤んぼさんを一寸訪ねます。今夜は中津泊りで、墓掃除が濟めば樂しみがあります。別府へは寶六さんのお父さんの吉古三（川柳號）さんが待つて居ります。そして三猿堂さんをゆつくり訪ねる事です。それから吉古三さんと宇佐八幡宮に參詣もします。

私の鞄の中には「川柳雜誌」二月號と三味線草一月號の二つがあります。三味線草は私は妙に手離したくないので持つて來ました。少し讀んだ計りだつたからでもありますが彼の謄寫版の努力に惚れたのも原因でしよう。

波は靜で平穩無事な航海ですが何んだか氣持がよくありません。正直な所を申上げれば晝食はやれなかつたのです。ルームは私共四人切りで廣過ぎて居ます。空向けに寢轉んで「川柳雜誌」を隅から隅まで拜見しました。雀郎さんの「素」結構です今頃斯んな事を云ふのは遲れて居ます、川柳家が俳諧を研究しないですまして居るのは間違つて居ます。其研究を發表すると此間迄笑はれたものです、これが雀郎さんに依つて高潮されたのはよい事です。大空からのひろしさんの詩の世界は「スポーツ」とか「勝負事」と違つて相手を倒さなくとも立派に自己を樹つる事が出來るのである。一節は特に共鳴です路郎さんの柳樽評釋は、其の熱誠と根强さは路郎さんの一面も伺へ是非最後迄續く事を祈つて居ります。竹馬居雜筆の省二氏愈々健在なのが何よりです。人間、馬、魚の三太郎さんには何日も感心させられます。三味線草のことから思ひ出して「川柳雜誌」は幾枚位ひ原稿紙を使つて居るかぢつと瞑目して數へて居ます。

冷刀さんの追悼會は今日仁川にある筈で宿題の選句は昨日送つて置いた。惜しい人の早逝は氣の毒です。（五・二・一）

ほんの斷片的な

平井蒼太

川柳界での眞實の意味に於ての理論家である前田雀郎氏「素」に於て所謂平面派作品の總括的批評を試みて、智覺の遊戯に過ぎないと斷じ去つてゐるが、更に引續いて「詩は出すまでもなく智覺の遊戯ではないので、何處までも感情に從ふべきもの」と述べてゐるが、智覺無き感情と云ふものが一体獨立して發生するものだらうか。斯んな揚足取り的な言辭を述べるのは不本意とする處なのだが、理論家である氏にこの言を聞く丈けに、一層氣に掛るのである。

人の感覺は、殊にも智覺は、先天的な体質の遺傳性、及び後天的な環境、智的教養などの依つて以て來たる結果から、

各々異つた智覺を萬象に對して把持するやうになるのは當然であつて、夫れが又感情の發生に當つては、各人各樣に色づけられた感情の種々相となるのではなからうか。

新興作品の、所謂太陽の一片、涙の二等分などなぞの言葉を雀郎氏の頭は智覺の遊戯と見　新興作家の彼等は、個性の感覺に基づいた詩美の世界へ到達する可く撰み出した、新鮮な感情を表現する所のものとするのであらう。

所詮は感覺のテムポの離たりから來る遠い空間の間隔ではなからうか。

映畫俳優上山草人は、米國に於ける成功を背負ふて故國人の錦を飾つた。草人なる名の何んとヂャナリスティックな響を持つてゐることよ。雜誌編輯者どもの何條看過する筈があらう、文藝春秋は歡迎座談會を催し、新青年は探偵的興趣を談らせてゐる。文藝春秋の文壇人の顏ぶれから見ても、酒を談り女を談り、加州邦人の氣質から邦人俳優の覺悟に至る迄を談らせてゐるのは、一般的な聞き上手の常識であり、新青年の夫れに於ては、草人獨自のオリエンタル・ミステリーを語り、米人の東洋觀、草人の手の持つ怪奇的表現を亂歩と語り、續いて藤原義江とはお互にフアンを持つ身の樂屋話を談じてゐる。文壇人、獵奇作家、ヴオカリスト、其各々の興味の重點を、判然と反映してゐる。ロマンチストである川柳人麻生路郎氏と酒を酌んで草人に談らせて見度いとは、强ち私一個の望みではなからう。

川柳の社會的進出の、取る可き路ではなからうが、川柳雜誌經營と云ふヂャナリズムに立てば、又これも一つの手段ではなからうか。

句會是非の問題なぞは、もう言ひ盡されたことであるかも知れないが、何日か住田亂耽氏が、句會の歸途、始めて川柳工場から放たれた職工の安易を覺ゐる、と書いてゐるのを見たが、新人を以て目されてゐる氏に似合しからぬ言葉ではなからうか。

萬人ともに、終日終夜生活の向上に努めてゐても、或る時期には多少の潤ひを求め度くなりはしないか。其潤ひが酒になり女になり觀劇になり、或は娯樂と呼ばれる一切の姿となつて、現はれて來るのではなからうか。

結局、川柳人に取つての川柳的娯樂を句會と云ふ形式に取つてゐるのだとは考へられないであらうか。故に、哥留多、弄花、麻雀などのやうに、勝負は別としても、其智的競技に對する、言ひ知れぬ魅惑は仲々忘れ難いものなのであると同樣、句會席上の作句的競技、同川柳人であることの空氣の和ごやかさ、などなどの魅力は一寸捨て難い味のあるものではなからうか。

だから句會の課題吟なぞは、一顧の價値でも置く必要はないのだ。亂耽氏の苦悶は、句會席上吟に迄責任を持たうとする良心と、多少の臆測を許して戴けるならば、良き競技選手たらんとする所から發生する、苦悶ではなからうか。

詩美の境地が、課題に依つて創造されるなぞとは、既に今日の川柳人からは問題にされない明白なことに屬してゐやう。川柳人の智的遊戯と句會を見るなれば、之も亦甘い慰樂境ではあるまいか。

節分の思ひ出

上田柳影

おしなべてすべてのものに節分が來た老人の頰骨には淋しいあきらめの影が宿り青年の目ははきく〳〵と希望に燃ゆる。

年豆を數へる緊張した心の中につくづく行末を考へさせられるのはおそらく私だけではないだらう。川柳人として私は二十の節分を迎へた。

表面には神もうでへだろう、足音がた

わまなく續く。私はぢいつとして只靜かに自分と云ふものをよりよく考へて見る必要を感じてくるのだつた。

行末は多端である。川柳に繪畫に生活へさらに〳〵健實なる私を作らなければならない。

そんなことを次から次へと考へてゐると、がらゞゝと表戸があいて色の白いかほちやな顏、鼻の下にはお定りの二本線を引いたづらつ兒の顏がにいつと出て

「ろうそく代なとやつてんか」

と早口で云ひ切るといたづらそうな二つの目がじいつと私の顏を見た。

どこからかと何氣なくきいて見た。

「河堀神社(氏神)」と答へる。

いたづらものめがとごなりつけてやりたい心を押さへて錢を投げてやつたのである。少年は小さな聲で「福はいれ」と云つてどこかへ行つてしまつた。少年の姿は私の心に忘れかけてゐた幼き日の私の姿を思ひ出させてくれたからである。

◇

おんごろもつちや、うちにこいろうそくだいなとやつてんか、と節分の夜ブリキの空カンをたゝいて町中をまはるいたづらものゝ一組についていくらかの分け前へ小さな心をもつて「こーこの家へ福はいれ」「こーこの家へ鬼はいれ」と言つては寒い町を冷たく鼻をすゝり乍らついて行つた私の姿が思ひ出されて來た。ぢいつと目をとじてゐるとたまらなくその時代がなつかしくなつてくると共にすべての感情を忘て、只邪心のない小さな子供にかへつて大きな聲で「こーこの家へ鬼はいれ」とさけんで見たい樣な氣がしてくるのであつた。(五・二・三)

猫の家出

辰巳籬楓

或る冬の日から、眞つ黑い可愛いゝ猫が流し元に現はれた。叱らないやうにして、物の殘り等をあたへてゐるうちに、なれてしまつて猫の方から、とやかくとあまへるやうになつた。そして上にのぼつて「自分は此の家のものだよ」と云はんばかりに顏を洗つたりするので、こうゝ家に置いてやる氣になつて、食べ物を入れる器も取りそろへ、チビと云ふ名までつけてやつた。そんなにして居るうちに月日は經つて、どこの雄猫の種子を宿したか、めきゝゝと腹が多きくなつて來て、こうゝ子を三匹も書齋の机の下に產み落した。

やうゝゝ飯が食へるやうになつたので毛色のよくない奴から片附け、三毛の子を一匹殘すことになつた。此の三毛がやうゝゝ成人して、とやかくと可愛がられる頃、親猫の黑は家出してしまつた。約半月の後、近所の下宿屋に入り込んで居ることがわかつたがよびもごしにも行かずにほつて置く、子の三毛はと見るに、親猫の家出をよそに、よくほたへて居た月日は流れて夏となつた。家內中川舍に一週間ばかり暮すことになり、猫に留守をたくして家をあけた。歸つて來ると留守番はどこへ行つた事やら正しくこれも家出して居る。親子二代の猫の家出、鄙會は猫までも薄情である。(五・一・三一)

(十九頁よりの續き)

しみ且つ愛する事の出來ない者が何うして自分の本當の心を捕へ得ようぞ、と云つたやうな事が書いてあつたが、よしそれが一面觀にしろ味はふべきものがあると思つたのである。

紋太……大体に同感であるが、僕は此句は仕舞ひの霧で危ふく平凡を逃れて、清新な感じを持つたと思ふ。それを眞夜中の霧の有無に多少の疑ひを持つが、假令無いにしても此の句の感じとして差支がないと思ふ。

路郎……先程山雨樓氏が澤山な例句を擧げられたが、僕は此作者の十六句の中で特に巧みな句として、又僕の好きな句として

うてば響く我と信じて疑はず

はかなき望「冬來りなば」

を推賞したい。最も他の句が拙いと云ふ意味でなくて、特に共鳴を感じたので申し述べたまでゞある(寄三篇記)

各地柳壇

川柳雜誌社　二月例會

二月六日夜　於「端之坊」

春とは名ばかりの、餘寒の夜だつたが多數の柳友の集りで、なごやかな氣分に浸つて句作した。席上路郎先生から「人間の求むるもの」と題する有益な講演があつた。今日から句會係を拜命した。私と柳影君とが綠雨氏の親指導で萬端準備をしたので殊更印象深い句會であつた。（丸山公二記）

（參會者）路郎、新水、柳影、公二、苦笑、英郎、山雨樓、東洋鬼、露斗、ひろし、一柳、九葉、碧水、二郎、かほる、千春、鳴玉、鮎美、豆秋、靖弘、里十九、綠雨、机堂、莢一、正博、古燈、亂調子、紫郎、凡々子、明果、貴山、裸人、夕鐘、柳精、學人、麓生、双葉子、紋太、與詩夫、勝、愚陀、亂耽、杏三、灯舟、大紅、野人、鵜足、源坊、雨町、內匠守

兼題　留守　ひろし選

交留が留守でれづみをもてあまし　柳精

留守を賴んで恥しく出る　舟々

さり氣なく留守居を賴む老夫婦　正博

留守と云はせて何もせぬ机　杏三

留守番の父に一日用があり　與詩夫

四五日の留守に小鳥を預けられ　新水

留守宅を案じる父の筆太し　鳴玉

惡友へ二階の兄は留守にされ　一柳

見送つてハツキリ留守を味はひぬ　苦笑

朝刊がはみ出たまゝに灯がともり　幻草

主人留守大きく背のびしたりけり　方眠

留守居する子供座敷に廣くゐる　英郎

つゝましく留守をしてゐる父なし兒　夕鐘

留守番を唯々諾々と母の老ゐ　清路

佛壇を閉めて留守番寒くなり　東洋鬼

佛壇へ老婆は留守を樂しまむ　柳影

留守番は不意にラヂオが恐くなり　豆秋

留守番へ額の一字が讀めぬなり　公二

野良の留守燕へだけの窓をあけ　成馬

留守へ來て意見する氣の間がぬけ　双葉子

たよりない留守居へ名刺置て出る　九葉

女房の留守に集金やつてくる　英郎

集金へ留守の格子が靜かなり　學人

留守に來て近所の時計聞いて去に　かほる

お隣の留守にお隣覗かれる　加藤

悲しい眞實社長のお留守　凡々子

裸女の香がこゝろの留守へ來る　愚陀

留守の鏡臺のつめたきものに觸れ　亂耽

留守にしておけと且那飛車を打ち　汀舟

妻の留守得心の行く酒に醉ひ　同

留守番にされた炬燵のぬくすぎる　山雨樓

留守の戸を叩いて犬にぎよつとする　同

留守なれば仕方もなしの茶をよばれ　紋太

留守といふ門をばたりと閉めて出る　同

內らから掛けて留守居の姉妹　突支坊

留守を待つ隣りの寒い上り口　同

賴まれた留守の戸が開く聲を出し　同

席題　養父　山雨樓選

あたゝかい陽射の中に養父ゐる　鮎美

我儘も養父と知らず云つてゐた　莢一

養父養母の中に成人　凡々子

絹夜具へすまぬ〳〵と養父老ゐ　學人

養父の目只はてしなき海の面　柳影

喜んでくれる養父の酒をつぎ　鳴玉

病んで居る養父が見れば言ひしぶ　汀柳

おちぎして養父の前の火鉢なり　綠雨

總明に養父の帽子持つて來る　紋太

明けがたは近み養父の咳拂ひ　苦笑

冬の夜養父の髮の艶々し　九葉

呼出しに來たは養父と云ふ男　突支坊

養父もう子供へ折れる年を折り　亂調子

距りをはつきり意識する養父　同

あらためて養父へ賴む事が出來　露斗

藝者せよとて貰われし娘にあらず　同　愚陀
點々と養父酒つぐ夜の寒し　同　亂耽
しら〳〵しくも養父の名にかくれて居る　同　亂耽
養父には鍬を與へてマルキスト　同　東洋鬼
養父にも似てゐる顔のいゝなづけ　同　東洋鬼
半生を養父へ貢ぐ三味を持ち　同　東洋鬼
中風の養父へ怖く戀をする　同　東洋鬼
剌青を見せず且那へ養父あひ　同　東洋鬼
(客)意見する養父の聲がとがつて來　同　正博
(同)養父のものうきは朝の挨拶　同　貴山
(同)心得た樣に養父はだまつてゐ　同　綠雨
(同)養父といさかひ朝の白い新聞　同　ひろし
(同)損をした養父と夜を起きてゐる　同　九葉
(人)養父の鏡へ美しくゐる　同　凡々子
(地)寢よといふ養父の堅い聲なり　同　紋太
(天)養父の鼻に威壓されてゐる　同　亂耽
(軸)ほんたうの話も言はず養父逝き　同　山雨樓

席題　破談　東洋鬼選

氣を惡くすなと破談を送り出し　加藤
破談など氣にして居れず高砂舍　柳精
いつそ破談と決めたは一時なり　里十九
眼鏡をはづし破談へうなづく　亂耽
調停の破れ强がる爭議團　ひろし
破談してから生甲斐を感じ　苦笑
破談とは夢にも知らず縫うて居る　季堂
すき燒のなかへ戻つて來た破談　鮎美
ふだん着に着かへて破談すわるなり　かほる
こゝちよく破談それから獨りゐる　紋太
破談になつた夜をきちんとわけてゐる　九葉
破談にせよと口紅の濃さ　柳影
緣談が破れショールをかへて出る　同
破談もう冷めた酒には手も觸れず　豆秋
部屋中の煙に破談すつと立ち　同
彼を見まじと破談のその後　山雨樓
(人)別莊へ破談と知れてからの海　同
(地)破談から姉は淋しい主義に生き　古燈
(天)煙突は依然と高く破談の日　愚陀

席題　道　巾　かほる選

肩組みの道一ぱいに醉ふて去に　東洋鬼
また元の道幅にして市塲晝　源坊
交番へ斷つて行くせまい道　野人
道巾がかわつて戀になる二人　亂耽
老人の横切る道が廣すぎる　ひろし
馬の首のびて道巾せまくなり　一柳
道巾にほし傘輕く音をたて　英郎
道巾を一ぱいに來る女連れ　里十九
道巾を子を歩かせる夫婦づれ　鮎美
道幅の變るところで助手が降り　源坊
道巾を入江たか子がせもうする　靖弘
病院に道巾を見せるマドがあり　同
道巾を無視したやうな穴を堀り　紋太
不規律な町のまん中牛がゆき　同
道巾をへだてゝ暮すいそがしさ　鵜足
道巾のうちに自分の影がなし　同
道巾を一人で歩く醉ばらひ　攀人
道巾が知つた女に逢ひ乍ら　同
(軸)道巾が廣く寫つて夏景色　かほる

席題　冷　え　攀人選

寒さうに晝をたべてる女の子　九葉
尼の病氣へわけて底冷え　山雨樓
冷え切つた空へ三ヶ月樣が出て　露斗
四五日が大事の父へ冷えつのり　突支坊
冷え切つて歸れば火鉢冷たすぎ　正博
心の冷えた母に甘へむ　凡々子
醉ふたのがそれは冷え込やうぞと云ひ　裸人
此の冷えへ戒橋をば二度渡り　麓生
石疊冷えて參道雪になり　明果
電車道冷えて工夫の音が冴え　同
冷えてゐる盃重く持ちあげる　同
(佳)よう冷えますなと藥湯の湯氣　柳影
(佳)冷え切つた心に母の夕御飯　同
(佳)病人に冷えはせぬかとたずねら　季堂
(佳)冷えること敎授の靴も變りなし　豆秋
(佳)冷える〳〵女給の膝に冷ゐる戀　亂耽
(佳)冷え切つて女工五年を稼ぎため　愚陀
(佳)底冷えにまだ立つて居る立ん棒　苦笑
(佳)約束に後れてなら今日の冷え　一柳
(佳)びつたりと閉す北風　亂調子
(佳)鼻の先だけが冷れる樣に見え　鵜足
(佳)冷え切つた中を相合傘で來る　加藤
(佳)新婚の車中へ氷柱など見えて　里十九
(人)氷雨しと〳〵巡査の足拍子　同
(地)一人寢のかべを見てゐる冷なき　公二
(天)冷え切つた心へ番茶ついでくれ　双葉子
(軸)水の色冷え切つてゐる夜の底　鳴玉
　　　　　　　　　　　　　　　　　攀人

席題　硯　箱　互選

硯箱また氣を變へて墨をすり　鮎美
硯箱疊の上へ持つて來る　かほる
書けそうな筆見附からぬ硯箱　碧水
書置の筆につめたい硯箱　柳影
硯箱使はぬ筆のかたすぎて　正博
硯箱いつもよごれた儘でゐる　鳴玉
硯箱退窟そうに待つてゐる　鹿十

硯箱飾りのやうになつてゐる　千春
硯箱銅貨一枚黑くなり　豆秋
怖しき女と知りぬ硯箱　亂耽
硯箱中に世話人もめて居り　古燈
先生は朱で書いてる硯箱　新水
硯箱尋ねる程の暮し向き　露斗
もう切れる氣で引き寄せる硯箱　東洋兒
美しい歌が生れる硯箱　琴人
硯箱さへいかめしくゐる　凡々子
硯箱よごれてありて妻は老け　同
硯箱羽織の人が寄つてゐる　九繇
硯箱藝者は背を向けてゐる　同
目錄へ父おもむろに筆を取り　莢一
優等の硯箱父が貰つとき　同
硯箱裏梯子から持つてくる　貴山
硯箱廊下へながうほつとかれ　同
硯箱月末といふ蓋をはれ　山雨樓
硯箱今日はお客を待つ日なり　同

尙々日冷刀氏夫人紫陽花女史から、左の句を寄せられて、諸氏に感謝の意を表された

諦のつく頃悔みまた受ける　紫陽花

（參會者）路郎、文蝶、愚陀、雨町、英郎、露斗、豆秋、かほる、金太樓、孤舟、英賀夫、柳甫、里十九、峰嵐、成馬、汎堂、たけし、松郎、琴人、大黃、柳月、稔、さだを、炭車、黑天子、夢路、沐天、柳影、公二

兼題　悔み　路郎選

だんまつて只親しさに泣いてゐる　柳影
お悔みに行つて新の涙が出　炭車
お悔の客を喜ぶ子が二人　黑天子
人の世の義理に悔みのながすぎる　稔
無口なる人の悔みもまた悲し　たけし
阿彌陀經悔みと別な聲であげ　柳月
お悔みが後の方針聞いてやり　英賀夫
口重の悔みは頭ばかり下げ　峰嵐
往生をほめて今度は俺の番　成馬
香の煙君の寫眞へ流れ來る　孤舟
悔みより香奠さきに挨拶し　汎堂
お悔みの仲に呑み友達がゐる　露斗
長い悔みへ葬具屋の足音　琴人
次々に替る悟みの空虛なる　沐天
お悔みを云ふには息子若すぎて　雨町
後家さ云ふ氣持になれず悔みけり　さだを
健康な顏で悔みにやつてくる　同
女湯は犬の悔みも受けてゐる　里十九
姉の死へ悔みも云へぬさここに住み　同
其悔み明日の混雜察しられ　かほる
その悔みあしたの時間聞いて置き　同
悔狀實は舌でも出したい氣　大黃

（佳）口の中だけで悔みは云ひ終り　同
（佳）悔み云ふ人の秋の風重く　愚陀
（佳）南地の灯君の亡なつたを知らず　孤舟
（佳）お悔みのうぢ何も云はず濟み　夢路
（佳）人間のもろさを說いて社長去に　稔
（佳）ぶつきらぼうな悔み乍らも泣かわる　松郎
（佳）味氣ない思ひで悔みから戻り　公二
（佳）心からの悔み我が身に引きくらべ　金太樓
（佳）お悔みをさけて女房は下廻り　同
（佳）落着かぬ悔み大金貸してあり　琴人
（佳）悔みの中へ云ひ譯もはさんで　同
（軸）てにをはのあはぬ悔みとなりけり　路郎

兼題　商用　松郎選

商用の時計ばつかり見てるなり　さだを
商用を兼ねて見舞の折を提げ　大黃
商用で來たと思へぬ祇園に居　沐天
商用の棧橋寒く黃昏れる　豆秋
馬鹿になりきる商用に灯がともり　夢路
商用を今年は嫁を送り出し　かほる
新聞を讀めと商用笑はれる　稔
商用で行けばアスファルトの堅き　たけし
遊覽バスに商用ゆれてゐる　柳甫
落ぶれた友へ商用派手に來る　同
商用を忘れたやうにいける口　路郎
商用で踊れば踊る才も持ち　同

席題　刀　夢路選

御ちうしん刀を杖に戻つて來　露斗
獅子舞の刀を振つて廣うなり　柳甫
大刀を舞妓こつそりかくしてゐ　里十九
守衛長一刀流の腕があり　稔
狂人の刀少しく短かすぎ　英郎

雜誌社　冷刀追悼句會

二月十五日　於端之坊

本社同人で仁川支部幹事の矢田冷刀氏が一月十六日尙春秋に富む身を惜しくも逝かれたので、故人を偲び冥福を祈るべく追悼句會を催した。冷刀氏と親交のあつた夢路氏が來會されて故人の思ひ出を語られ、主幹は故人の人成、閱歷柳界に盡された功蹟、遺された句、交友の思ひ出等を「冷刀を懷ふ」の題下に話られ、一同しめやかに故人を想ひつゝ句作に終始した。久し振りの松郎氏、近江のたけし君等も參會された。

鎧櫃刀のタバは邪魔にされ　柳月
ほへて來た犬へ鼠戯散つて行き　黒天子
敵打ちすんで刀が邪魔になり　孤舟
助太刀は長い刀をさして來る　同
抜刀をすればセットのせますぎる　雨町
飾られてゐて名刀のもの足らず　同
(人)災ひをする名刀を寒う見る　ひろし
(地)町人に刀の重み尋ねられ　文蝶
(天)嬉しさの餘りに拔いた刀なり　さだを

席題　ひとり娘　かほる選

ひとり娘の下駄をつまづく程に千し　松郎
一人娘へまだ〳〵若い母であり　柳月
母一人娘一人今年二十三　大黄
ひとり娘へ大きい鏡買つてやり　英賀夫
父の亡き後をひとり娘すなほすぎ　成馬
ひとり娘のまた肺炎になりかゝり　孤舟
一人娘錦紗がいやになつて來る　露斗
喫茶店ひとり娘を店に出し　雨町
ひとり娘へたどんを二つ入てやり　沐天
ひとり娘の髪つやゝかに春となり　ひろし
焼香に抱かれた一人娘なり　夢路
ひとり娘の夜具ふか〳〵と戀を見る　愚陀
一二寸開けとく辯の一人娘　琴人
獨り娘の元氣にお辭儀して座り　柳甫
ひとり娘は下駄の鼻緒が氣に入らず　稔
ひとり娘だから我儘はさせられぬ　同

席題　手　拭　互選

まわつてる顔へ手拭持ち出され　黒天子
手拭も持たで風呂屋へ行くつもり　金太樓
ほうかむりちと手拭の短かくて　汎堂
手拭の中から顔が笑つて居　松郎
手拭が吊られて便所靜かなり　公二
江戸堀に名殘りをとゞむ手拭屋　ひろし
手拭の端しに魂ひつゝかゝり　柳影
手拭を植木屋松へ忘れてき　同
手拭のしなびて世帶疲れたり　たけし
手拭の白さ痛々しい身体　同
手拭が溜り二階にすみなれし　
早春の朝の手拭をしぼる　
暮れの街をタオル提げて行く　

新年川柳大會　(松山)

岩本素人報

兼題　招　待　素人選

勿体をつけて招待券をくれ　青帆
その金で招待席に茶菓があり　碌々
招待の女は女同士が來　大鷺
寄附金の高で招待席の順　紫石
招待をせられ祝辭に腹が減り　柳花坊
お客はと見れば招待席ばかり　春峰
招待へ講演を強ひ酒を強ひ　雨眠
痛快な雨招待に洩れて降る　文芳
招待日彼女の目立つ厚化粧　武子
招待の席へ會社の顔で出る　大樓
知らぬ振も出來まいと云ふ御案内　碌々
招待は痛し痒しの選擧前　雨桂
招待券ですに姑も行く氣なり　春峰
行かうかと招待券を二枚出し　夢郷
招待に氣骨の折れる包み物　松葉
招待は何かほめたい眼を配り　吐詩坊
招待に自慢の妻を連れて行き　露村
今出たと云わせ招ばれる顔を剃り　○美
嫉ましい眼が招待の席同志　五健
拍手することも招待席の義務　水樹
招待の雅號に祖父の不審がる　川の字

兼題　袴　五健選

舞扇袴の塵を拂ふよう　大樓
羽織袴で長屋の人と思われず　春峰
とも布を探して愚痴る子の袴　青帆
磯節の列へ袴を脱いで立ち　拓水
袴もうそろ〳〵邪魔な年始客　碌々
ずつこけた袴一次會からの醉　柳花坊
袴腰ポンと叩いて付けをわり　吐詩坊
洋服の次に袴が座を崩し　たまき
演説の袴氣にする辯があり　大鷺
やゝ固くなつて袴の幅を取り　水樹
寫眞屋のまゝに袴と角隠し　双葉
醉ふ程に袴だん〳〵長くはき　芳之助
若旦那袴の紐に暇がいり　武子
二次會が知れる袴の置き所　文芳
其まゝへ袴を着けて用をたし　素泉
只一人袴付けざる間の悪さ　露村
女學生胸から脛へ袴はき　晃
振り返る袴へ扇子屈けられ　水樹
返盃に袴を踏んで立ち上り　素人
緋の袴蠟で作つたやうな顔　○美

秀　逸

六年生つんつるてんの袴はき　雨桂
カシミヤの袴とあどきなく老ける　○美
袴料無雜作に母言ひ當てる　同
合格の袴へ小豆飯が落ち　青帆
儲ければならぬ袴の崩れよう　雨眠
(人)燒穴のある袴にて碁の師匠　大樓
(地)袴代帶代それで事決り　紫石

(天)嫁き遲れ黑い袴の朝を出る　素人
(軸)信じさすために袴の折をつけ　五健

兼題　絡　子　水樹　選

格子戸も光り妾も世帶じみ　春峰
格子から覗いて見たい十二三　武子
格子戸が旅行で隣世話がやけ　碌々
二丁三味聞いてるらしい鬼格子　夢郷
窃つと繰る格子鋭ひべルが鳴り　雨眠
格子戸の際まで喧嘩やつて來る　たまき
警察署何が怖くて鐵格子　同
格子戸が走りすぎたる鈴の音　大鷲
格子戸のあく度禮手がかゝり　紫石
ついて來る狆を叱つて格子しめ　五健
荒格子こゝにも婆婆と別な月　雨眠
もう一度格子から見るあの騷ぎ　大鷲
赤毛布廓の格子見てあるき　雨桂
待つてゐた格子の鈴へ猪口を置き　夢郷
太格子眼と眼の戀へ日が鈍い　文芳
まゝごとをまた始めてる格子の間　武子
大且那格子へ外れる苦勞あり　芳之助
格子から陽氣が流れる繩のれん　大樓
(客)仲裁もせずに格子は人の山　素人
(同)格子から聞いてゐれの眼が洩れ　吐詩坊
(同)格子戸を外して嫁の荷が這入り　青帆
(同)格子戸は親仁のもんだ音を立て　双葉
(同)格子戸で何をさゝやく内と外　拓水
(人)仰山に格子を閉めた大吹雪　柳花坊
(地)磨かれた格子子分とやうがあり　五健
(天)格子窓牛乳を飲む人が住み　碌々
(軸)格子から今結ひました髷を見せ　水樹

席題　盛り場　○　美　選

盛り場か拔けて壽司屋で待たされ　雨眠
盛り場になると袂えすがりつき　双葉
盛り場で後悔をする乳母車　水樹
盛り場を拔けた男女は月をほめ　大鷲
急用の人を盛り場いらだゝせ　水樹
盛り場へ來て思ひ出す煙草人　青帆
三越で不景氣などゝ思はれず　兩桂
盛り場を拔けて初めて我を知り　春峰
盛り場の靜まる頃に鷄が鳴き　拓水
盛り場へ一稚の用は渉らず　同
千日で珍客袂切られて來　水樹
盛り場で逢ふと手輕に飲む話　同
(客)盛り場へ來て出稼の氣が狂ひ　大樓
(同)盛り場の冬へ氷水賣つてゐる　夢郷
(同)幻惑魅惑盛り場を千鳥足　文芳
(同)盛り場を夜鳴うどんは暗く　同
(同)盛り場を危な氣もなく出前持　五健
(人)見るだけの盛り場へ來て買散を　碌々
(地)盛り場に渦を卷かせて女優　五健
(天)盛り場のチボだ〳〵と崩れ立ち　雨眠
(軸)盛り場へ寢るとこの店を出し　○　美

席題　手懸り　互選

まだ手懸りりもなく春になり　武子
犯人は妙に手懸りおいて逃げ　晃
手懸りを得てあたふた發つ夜汽車　青帆
手懸りへ一稚の記憶ほめられ　水樹
手懸りは見馴れた筈の左文字　雨眠
手懸りがないので死んだ事にされ　碌々
諦めた時分手懸りついてくる　青帆
提灯と提灯手懸りもなく別れ　五健
手懸りは只九州とあるばかり　素人
手懸りに媒の手箱調べられ　夢郷
手懸りがないに母親泣き暮し　兩桂
手懸りのついた時分に親が死に　大鷲

席題　素　直　互選

素直にもなれないそこに譯があり　碌々
ブルドツク主人が言へば素直なり　五健
死ぬ前は素直に藥呑みました　素人
ちと醉ふた親仁素直に買つてくれ　大鷲
荒馬も素直に俺を知つてくれ　松葉
仲裁の苦勞素直に事がすみ　春峰
二日醉亭主素直に詫びてゐる　大樓
子が出來て素直さ女房から離れ　大鷲
極道な兄へ素直な腹違ひ　水樹
別れますと素直に言ふて泣き崩れ　素人
顏色へ出さず素直によく動き　双葉
花鋏素直な枝を持て餘し　大樓
出戻りの素直に動く臺所　青帆
素直だと言われ胃散を飲んで居る　素泉
其當時素直に終る日が續き　春峰
何事も素直な嫁へ乳母は泣き　雨眠
素直さを眼元に見せてやせており　夢郷
其當座だけの素直にもめ始め　文芳
折にふれ素直滿座を驚かし　松葉
姑も嫁の素直を知つてゐる　兩桂

川柳雜誌社**北濱支部小集**(大阪)

二月四日　於拙居　谷村稔報

席題　女　工

女工連車中の視線ゐびて降り　一舟
弟の學資へ女工身を捨てる　伊佐美
蜘蛛の巢へ女工嬉しく國を出る　同

表彰の緣談なんか考へず　同

席題　節　分

女事務今日節分を結ふて來る　一舟
お化け見に出る歳越の夜の街　桂枝
いたづらに節分の豆增して行く　稔
丸髷を見にきてほしいをんなの氣　同
こゝろよく醉へば節分たそがれる　同
豆も撒かずに友と酌む夜　同

席題　初　老

近よればもう初老なり耳隱し　一舟
責任が重いと初老稼ぐなり　桂枝
晩酌のいかのかたさをフト感じ　伊佐美
御詠歌も器用に流し得て五十　稔
ことゴ〳〵にあせり氣味なる初老の眼　同
初老の父に寢具のつめたさ　同

席題　男

めぐまれぬ男に今日が暮れて行く　伊佐美
失業の何のと男甲斐もなし　一舟
たしなめた男もやはり飢ゑてゐる　稔
情熱の中にどんより男居る　同
約束した時は男醉ふてゐた　同

席題　雜　吟

聞かされた方もほろりとして話し　南生
信心の片手は顏の蚊を拂ひ　同
決心もなく失業の日を送り　桂枝
老いの身の只默々と稼ぐなり　一舟
狂人の寧ろ呑氣な日を送り　同
緊縮の春ほがらかに醉ふてゐる　伊佐美
忍從の山清々と春に遭い　同
常識へ遠く子供にからかわれ　同
このわたで醉ふ嬉しさよ春の酒　稔

鮮人の夢鴨綠江をさかのぼり　同
愛著の絆を斷つにすらお金　同

川柳雜誌社　鳥取支部　川端柳社（鳥取）

中島　鐵洲　報

舊蠟神戸濱本揚花君歡迎句會を浦吾樓に開催、席題互選句を更に高橋かほる大兄の選を煩せり。

幕。女給。冗談。散財　源太夫

幕目にはつきり社長靴のあと　耕民
宴會の果てれむそうに掃ひて居る　鐵洲
どうみても女給やつぱり夜のもの　湖山
女給けふ暇なと思ふ雪が降り　伯山
女給皆美人に見えて酒をのみ　伯山
眞劍で居る信心笑つて居　湖山
冗談もまぜて上手に意見する　青水
冗談でしようと仲居は慣れて居る　揚花
面白い散財だつた醉がさめ　源太夫
散財の内にあくびを嚙みころし　鐵洲
大一座唄ひつかれて横になり　伯山
散財の一人電話に立たされる　揚花
散財へ時はかまわず更けてゆき　同

川柳雜誌社　守口支部句會（大阪）

二月八日　於双葉子居　朝田　新水報

兼題　笑　顏　双葉子選

父親の笑顏の隙へれだるなり　町二
失散も父の笑顏で救はれる　莢一
笑顏から笑顏に寫眞渡される　京郎
嬉しさを顏面筋が承知せず　同
珍客へ笑顏どころか泣き出され　新水
晩酌に笑顏の父の酌ぎ溢ぼし　同
笑顏見せずにたゞ貯めてゐる　同
（軸）新妻の話になると笑顏する　双葉子

席題　大　工　町二選

弟子入りの大工は棚を作つてゐ　莢一
喧嘩した話に大工火を圍み　双葉子
鉋屑大工無雜作に燃やし　新水
普請覗いて大工に家賃聞く　同
（軸）黎明へ徹夜の大工鑿を磨ぎ　町二

席題　厄　介　新水選

中風になつても芝居行きたがり　双葉子
御厄介ですと他人の飯を喰ひ　金太樓
厄介な荷物内證であけて見る　同
一ト月で厄介者にされてゐる　規堂
厄介な算術兄も見て矣れず　同
辭書を引くばかりリーダー捗らず　町二
別々の時間迎ひの傘が要り　同
（軸）厄介な兄に肩身をせまくする　新水

席題　梅　選

梅林へ二人になつて肌寒し　柳河樓
梅咲くと云へどやつぱり生活苦　蒼太
梅見酒日向日向へ席をかへ　莢一
鉢植の梅に隱居の手が伸びる　規堂
梅干を食べて姑のお氣に入り　新水
朝靄へ梅見といふが瓢さげ　双葉子
梅干とおかゆに丁稚病んでゐる　町二
梅林に吹き殘された畫の月　同
梅の香の强きに惱み溶けてゆけ　同
梅の實の病む子に遠く熟れてゐる　選

席題　忠　臣　藏　互

親の眼に大石主税ませてくる　町二

内藏之助一人になると腕を組み　同
一角は太鼓の音が鬼門なり　金太樓
源藏はむつとするよな息を吐き　柳河樓
師直へ今一太刀が慾しいなり　新水
由良之助行燈のかげに空いびき　蒼太
十八をお輕かるがる賣られてき　同
口紅をお輕涙で溶いてゐる　同

川柳雜誌社
鍛川支部 **一月募集吟**（島根）

伊藤綠之助報

茶　町二　選

禍壽草一株咲いた茶室にて　茂都子
茶畑の中からコーラス湧いて出て　紫光
子に乳房含ませたまゝお茶を入れ　かず子
緊縮といふ番茶の湯氣だ　綠之助
番茶のかほりに足投げて　同
(住)茶話の切れ目へ吹雪音を立て　專路
(軸)茶の花の日向へ蜂の迷ひ出て　町二

汽　車　喋　朗　選

動き出す車窓でしばし手を握り　キヨシ
汽車を書く子へ洗濯の空返事　かず子
御召車歡呼の裡にベルが鳴り　濱耶
つるはしを持つて二等車ぢつと見る　村路
トンネルを出ると變つた海になり　綠之助
憧れの都へ走る夜の汽車　茂都子
街の灯が廻つて見える汽車の窓　專路
(客)惱ましい月がもつれる汽車の窓　同
(客)病室へ汽車の煙がちと這入り　紫光
(客)着く汽車へ客引薄く塗つて出る　同
(客)プラットに妻の默して答へる　同
(客)裏切つた罪を詫びる汽車の窓　キヨシ
(人)送る目へ汽車はずん〳〵小なり　濱耶
(地)風邪の子を抱いて汽車を見る　かず子
(天)山々が汽車に應えて夜が冴える　キヨシ
(軸)三等車入院する娘未だ降りず　喋朗

川柳雜誌社 **御旅支部二月例會**（大阪）

二月二日　於いし堂　櫻井　圓角報

兼題　人　間　路　耶　選

人間でないと嚴しい意見され　樟腦
文明に人は手足をとられてゐ　無名子
人間よ女も女も金次第　嶺雲
人間の假面をぬいでの願です　飛佐志
凍る夜にむしろに卷かれ生きてゆく　同
人間同志だもの無理もないさ　多耶
人間の力で出來ぬ力なり　同
人間の屠道頓堀をうろ〳〵し　柳南
神經をむき出しにしてトップゆき　同
人間の殘忍性へ鷄必死　史
腦味噌の相違人間らちもない　同
四ツ足の姿に童眞ふるへてる　路烏
金と戀やはり金をばとつてゐる　同
人間味ふんだんにあつて名を成さず　翠夢
愚かにも人間の明日を樂める　同
平等と云へど階級嚴として　同
天にさへ勝つた餘勢の横車　圓角
心とは別に泣いたり笑つたり　同
人間の見てるは惡死ナンセンス　同
人間を捨てゝ遊んだ面白さ　同
(人)人間の外なる醉を呼んで居り　同
(同)人間の殖える事よ爭ふ事よ　多耶
(人)人間としての話へ地主よけ　翠夢
(地)やるせなさ人間なん消えちまへ　翠夢
(同)人間の住めば水さへ合ふて來る　圓角
(天)金見せる生氣付いてるおどつてる　路烏
(軸)人間にしてやると云ふ嘘をつく　路耶

兼題　髯　路　耶　選

村人に髯と伍長を見せにいに　飛佐志
素晴らしい髯ではあるが勞働者　翠夢
仁丹を思ひ出す樣な髯になり　嶺雲
變裝へ髯は虐待されて居る　圓角
髯の手前をと車掌に叱られる　路烏
關羽髯女を見れば捲いてゐる　同
筆ついで案山子にピンと髯を立て　房仙
何をして暮すか髯が目立つてる　同
人知らぬ苦心疎らな髯であり　同
(人)これと云ふ望みもない髯が伸び　柳南
(地)つけ髯をはつり本氣に呑む氣なり　房仙
(天)毛生液の頃もあつた友は老け　圓角

席題　父　子　路　耶　選

父と云ふ顏もしないが親しさよ　圓角
親なれば子にいやな顏一ッせず　嶺雲
わしがお前の頃は勉強したものだ　飛佐志
思想のみの違ひでない父と子　翠夢
(人)眞實の父子ならこそ爭ふか　同
(地)叱りつゝ母の仲裁待つて居る　飛佐志
(天)父のおとなしさ娘に毒だつた　圓角
(軸)好いたやうにする父は靴をはく　路耶
(軸)けふの父は聞くそうにも思へ　同

席題　燐　寸　路　耶　選

燐寸の火末梢神經へ痛々し　翠夢
煙草飲み燐寸落して淋しそう　嶺雲
燐寸とり色もつやかにつけてくれ　圓角

(人)行先がいつも燐寸でばれて居る　飛佐志
(地)どうしても燐寸のほしい幾時間　圓角
(天)華やかマッチも光るよ氣もいさむ　翠夢
(軸)もう空の燐寸へ一時鳴って居る　路郎

川柳雜誌社鳥取支部

青水居偶會（鳥取市）

二月三日　中島鐵洲報

一九三〇年の節分は流石に鳥取も豆蒔く音福呼ぶ聲を聞きませんでした。それでも厄落しの豆の包を四ツ角に見受けます(家内中各自年の數程豆を包み小錢を入れて四ツ角に落し後を振り向かないで歸るそうして自分の厄を拾ふて貰ふと云ふ譯だそうです)

此の夜湖山。耕民。青水。氏と四人肉鍋をつゝきながら柳談に耽ける。席題の選句を又又高橋かほる大兄を煩す

滑。雪道。肉鍋。情緒。

一とゝころ滑した手紙は書き直し　耕民
滑しゴムの思案のたらぬまゝうぞ　湖山
雪道を戻つて宅の暗ひ事　青水
快感を雪道の跡にさへ覺え　湖山
追越して挨拶するも雪の道　鐵洲
しみ〴〵と話す肉鍋煮えつまり　耕民
三味線がはいり肉鍋こげて居る　青水
肉煮る香ひ隣りから流れ　湖山
肉鍋に異性の一人面白し　鐵洲
遠出した妓三味線かりて來る　湖山
色町へ下駄を乾かす陽があたり　鐵洲

川柳雜誌社

螢ケ池支部句會（大阪）

二月二日　植田湖舟報

待ちに待つた路郎先生が來られた。とう〳〵に路郎先生が來られた。久しい間お目にかゝらなかつたゞけに非常に懷しく思つた。

席上先生獨得の漫談をまじへて、川柳の作り方に就いての御教導は、ひし〳〵と胸を突くものがありました。

其他ひろし、かほる、石竹、杏三諸氏の御出席下さいました事を一同感謝して居ります。同人新水氏の御投句も嬉しかつた。

兼題　椅子　石竹選

閉會に淋しく椅子が殘される　芳水
ゆつたりと安樂椅子へ煙草の輪　彌茶
横臥椅子ほしいと云ふて死んで　良三
藤椅子にあふぐことばるとの空の色　武郎
會場の後は椅子へ伸び上り　新水
一齊に立つた拍手に椅子がこけ　松露
重役の椅子を圍んだ笑ひ聲　波紋
椅子の埃を拂ふては掛け　大觀
椅子席は座敷と別な髪が來る　運坊
椅子にもたれて妻の事ども　湖舟
小學生椅子が低いの高いのと　義人
風邪ひいてからは藤椅子寒く見え　一味
讓られた椅子に感じる温かみ　長城
煩悶の椅子ジリ〳〵と後へずり　同
(軸)社長の椅子を引込めておく　石竹

兼題　思案　かほる選

そんな顔よせと思案へ陽が當り　澄美夫
思案中惡戯な友におどかされ　芳水
たま〳〵の休み思案でくれてゐる　義人
植木屋の思案根本をゝだ埋めず　波紋
今日もまた思案と日向ぼこに暮れ　彌茶
便箋へペンの動かぬ思案なり　武郎
結局は思案につきて姉を訪ひ　新水
親方の思案やたらにあごをなで　松露
思案して來たが梅田でまた思案　運坊
電柱へ頭突を喰わす思案顔　湖舟
とつおいつ思案の下駄は土をかき　義人
思案するでもなく思案する内氣　一味
思案から醒めた煙草の煙に咽せ　可章
同

席題　得心　互選

得心のゆかぬ家相のよし悪し　一味
得心で嫁いだものゝこの苦勞　可章
駄々子を得心させて骨が折れ　彌茶
得心と見えし父又愚痴を出し　芳水
一錢で得心出來ず母にすれ　義人
得心がいて母いそ〳〵と立上り　波紋
得心が出來て子供は入院し　笹や
もう死ぬもよい看病をして貰ひ　みのる
其場だけ得心をした説教所　長城
本人が得心ならば是非もない　波紋
得心のゆくよに着物着せてやり　白流
同

川柳雜誌社籔川支部

川柳たかせ會二月例會（島根）

二月十一日書　於綠之助居　伊藤綠之助報

兼題　貰ひ泣き　雷相選

泣き諭す母の心に泣かされる　定雄

貰ひ泣き一人は眼鏡を拭いてゐる　輝余彌
貰ひ泣き忍び音やがて太くなり　夢二
貰ひ泣き戀の芽生を知つてゐる　専路
貰ひ泣きさすのも居る女連れ　幸永
貰ひ泣き私もそんな時があり　同
その中の一人が泣いてみんな泣き　緑之助
客)貰ひ泣き言はうとすれば息づま　一笑
(同)貰ひ泣き女は顔を未だ上げず　緑之助
(同)貰ひ泣き抱れてる子に見上げ　麗丞
(同)貰ひ泣き吐息も止で幕が開き　夢二
(同)貰ひ泣き母は子の名を呼びけり　同
(人)貰ひ泣き淋しく波止場から戻り　輝余彌
(地)貰ひ泣き化粧くづれを氣にか　巨柿
(天)貰ひ泣き母は鏡へ消しに來る　輝余彌

席題　聲　専路　選

寝つかれぬ惱みへ癪な話聲　麗丞
空巣れらひに皮肉な泣き聲　巨柿
生埋めの生きてる聲のかすかなり　幸永
停電に其處動くなは父の聲　同
力なき聲なり處女の日を病んで　緑之助
尼寺に話す聲あり春近く　同
(人)文明は聲山を越し海を越し　幸永
(地)空想のふと突き當る虫の聲　夢二
(天)臨終のあの聲母は今いづこ　濱郎

席題　選　擧　緑之助　選

初ッ手から誰と決めてる選擧權　雷相
とりどりの噂選擧の日がせまり　夢二
公平な選擧といふもおろかなり　専路
五拾錢出せば入れると思ひきや　巨柿
(人)級長の選擧正しく行はれ　紫光
(人)反抗の意味で棄權をするつも　濱郎
(地)傳統の地盤を踏んで立つ選擧　専路
(天)頑冠り取つて上つた一票　夢二

席題　ピ　ラ　幸　永　選

女工達キネマのピラに立つてゐる　緑之助
酔ひどれてピラの女に話かけ　紫光
五六人拾つたピラへ顔を寄せ　麗丞
ピラ半分はがれたまんま畿を越え　雷相
飛行機の撒くビラ桃は花盛り　巨柿
電柱のピラにみぞれが突き當り　専路
無産派はピラにも主義を見せてゐる　同
(佳)どのピラも買はぬ馬鹿のやに書き　緑之助
(佳)飛行機で撒かれたピラのあてもなし　紫光
(佳)自動車の通つた風にピラが這ひ　麗丞

席題　時　計　雷相・緑之助共選

大時計そのうつ音もゆつたりと　定雄
ゆつくり〳〵劇場の大時計　濱郎
病室の時計が妙に氣になつて　利春
五分間遠慮なく廻り　夢二
腕時計驛の時計と見合はされ　麗丞
重態へ柱時計がにぶく鳴り　緑之助
二階とは少し遲れて二時を打ち　雷相

席題　幕　互　選

花の下踊りが幕の外へ出る　雷相
苦節十年幕引くことの妙を得る　専路
幕を引く舞台へ皆んな向き直り　麗丞
約束は一と幕すんだとこへ來る　同

川柳雑誌社糸屋町支部　**新人偶會**（大阪）

一月二十日夜　於舟々居川合舟々報

席題　柱　舟々選

引越しの花瓶一つ掛け忘れ　莢一
獨り身の柱へかけたまゝのシャツ　正博
床柱隠居の背であたゝまり　敏夫

席題　封　筒　互　選

なまなまい手紙へ封筒小さ過ぎ　正博
色封筒一番先に手にとられ　敏夫
封筒の女文字とは知らぬなり　舟々
見舞狀妹ので間に合せ　莢一
封筒に墨黒々と賞與金　規堂

第廿五回南海至誠　**如月例會**（大阪）

十日夕於天下茶屋集會所竹内多聞報

主として第二回川柳講演會といつた氣分で路郎先生の句に對するお話を承つた。先生の主張は相不變「誤られたる川柳觀を排す」で、此の根據のもとに川柳によつて人間を作るのが先生の使命であるとされてゐる。

川柳道は從來よくない強力や道案内があつたために谷底へ落ちたり、あらぬ方角に迷つた例が少くない。此れではならぬと此の川柳大道を分け登つた先生は好い月を眺めてから、ドリヤ一つみんなも斯んな結講を味はゝして上げ度いと、大きな慈愛の心からどんどん山から下りて、手を引き尻を押して上へ〳〵と導いて下さつてゐるのが、先生の現在である、ところが多くのみんなは上りかけては見るが、阪があつたり茨があつたりするとモー尻古垂れて終ふ。此れは何んな道から行つても、同んなことだが、川柳で特に悪いことは一寸見ると道化半分鼻唄三丁で行けそうに見えるために、汗も出さずに、草鞋も破らずにモー山の天嶺に上つたやうな氣に

なる、そんなボロいことがあるもんかとは先生しょちゆういつてゐられる。

「僕はみんなの強力や」とは先生の言葉で味はふべきだと思ふ、強力でもあり亦川柳經を説くお坊さんでもある、安んじて案内を願ふべきで何故に川柳の早呑込みをして本當の味を味覺せずにお山の大將になるか夫れは學ぶ人の考へ方にもよるが、一には前にも言つた誤られてゐた過去をもつごとく、外に町人文學といふか頗るなつきやすい、這入りやすい道であるがため モー二三度吐いて見れば川柳の形をなしてゐる、うまいと賞められる、「フンコンナモンカ」と思ふ。そのときはモー最も悪い病氣「自惚」にとりつかれてゐる。危いかな、強力がいくら聲を嗄らしても千刃の溪谷に身をのぞかせてゐることすら知らぬではなさけない。

眞如の月など何うして見えやう。

此の這入りやすい道である丈けによけい摑むのに骨が折れると思はれねばならぬ亦事實骨が折れるのである。此處に亦心得ごとは頂上まで行かずに濤が見へたやうな顔して下山する連中に途中で逢ふ、上つても詰らぬから止せ止せとそゝのかす、八合目位までで見た眼界では御來光の壯觀は語り得べくもないに八合目を頂上だと決めてしまふ。だから始末が悪い。遂には草疲れた登山者をよいことゝして捲添を喰はしてしまふのだから此の手輩が厄介だ。誘惑に逢はぬと別の道がチロチロしたり木の根に腰をかけたり、調子づいて駈け出して足を傷けたりなかなかにしてスタートした人數の僅かしか本當の絶頂には達せられない六ケしいかなである。

マー脇目も觸らずに足許を見乍ら足をいたはつて強力に道をきいて岐路をあやまたず輕い汗を拭きつゝ登りませう。信ずるものは幸なりである。導く人の使命を考れば導かれる者は導かれ易いやうに考れば損だ。踏張ろふ川柳の高峰へ人生の理想へ（多聞）

兼題　壺　　互　選

壺抱いて降りるプラット涙なり　呑風
泣きやまぬ子供に壺をあけて見せ　竹石
うつむけに壺は壺のかげがあり　多聞
壺のまゝ箸をつけてる獨り者　格子樓
珍味屋の壺は斜に中を見せ　萬年青

席題　刑事　　互　選

醉漢は刑事と知つて弱くなり　一壺
收賄をあげたが刑事氣にかゝり　骨皮
古手屋のやうに亂れた刑事室　飄山
刑事部屋の隅で見て來たウドン鉢　一杉
のどかさへ刑事と別な氣で歩き　黑天子
質屋から刑事は刑事らしく出る　貴山
捨てられた廉裏刑事大切にし　樹光
大物の側で刑事も寫される　萬年青
慈善家を刑事冷たい眼で見　格子樓
つまされまいとして刑事夷をかみ　同
刑事フト金齒を出して笑ふなり　多聞
抽斗にインキの轉ぶ刑事室　同
刑事先づ一わたり見て腰を掛け　山田
腰縄の無理聞いてやる電車なり　同

キヨシ居小集　（島根）

一月十七日夜　伊藤綠之助報

煙・母　　綠之助　選

春の野に煙は殊に白く見え　二三男
工場の煙に彼女乘つてゐる　利三郎
夕方の煙が見えて腹が減り　閑愁
火葬場の煙春の野を這ふて　キヨシ
青春の花も短かく母となり　濱郎
子の爲に母急に強くなり　閑愁
この母に若かりし日のありたるか　キヨシ

尖鋭會二月例會　（大阪）

二月八日夜　於内藤製造所須崎豆秋報

席題　正直　　互　選

正直な奴が巡査に叱られる　柳精
正直を看板にして目がたらず　鋭峯
正直に小供一錢拾て來る　斗入
斷りを妻正直に云ふてゐる　裸人
正直に務めて居たを惜しがられ　公二
聲がかれたる正直ものゝ損　石竹
正直へれむたい朝が早くさめ　琴人

席題　仕度　　石竹　選

仕度の手休むる暇もなし　綠雨
夕飯の仕度の泣止まぬ兒みてほし　公二
お仕度へ仲人氣が氣でないのなり　琴人
（佳）支度もそこ〳〵やつと間に合ひ　同
（佳）女房はおしめも入れて仕度なり　鋭峯
（佳）遠足の仕度を置いて寢る　裸人
（軸）泣きかゝる逃げ仕度と見えし　石竹

兼題　羽織　　綠雨　選

紋付が來ると樟腦のかざがする　友治
息が絶へ羽織冷たくのつてゐる　靜子
横縞の荒い羽織をしやくにさへ　裸人

借着とも見えぬ羽織はよく似合ひ　柳影
羽織着てペッタラ漬を買ひに行き　豆秋
羽織出させて何所へお出でか　同
(佳)見て居られず羽織まろめる　石竹
(佳)紗の羽織肩を落ちそう　琴人
(佳)對の羽織に夫人若々し　ひろし

席題　親しみ　琴人選

親しみの中にちよい〳〵借が出來　豆秋
目に余る親しみと笑はれる　石竹
五十の夜をラジオに親しむ　柳影
親しい仲へ小餅やけかゝり　柳影
同郷と云ふ事にさへ親しまれ　公二
階級もない子等の親しみ　同
笑ふてることも親しいお友達　緑雨
こゝへすわれと座蒲團おさへてゐ　同
ひよつこりと忙しい中を誘ひに來　裸人
悲觀の友へ酒ついでやり　同
(佳)親は何んにも言はず手を握り　柳精
(軸)議論とは別に親しい酒を呑み　琴人

兼題　物思ひ　ひろし選

振袖を喰へてる物思ひ　鋭峯
物思する程初心な奴でなし　柳精
物思ひ不意に笑つて見たくなり　豆秋
考へがつかぬ机へフケが落ち　同
物思ひラヴ屋の笛が遠ざかる　裸人
ぼつれんと柱にもたれ雨をきゝ　同
物思ふ夜を淋しく女工ゐる　柳影
二時の音聞いて寢返る物思ひ　公二
空は晴れて物思ひ止まぬなり　緑雨
物を思へば望み薄らぐ　琴人
氣まぐれとなる茶の澁ぶさかな　石竹
ひと筋の毛を伸ばし見るひとり　同

こども川柳會（大阪）

田邊苦香　瓏報

席題　屋根、マラソン、櫛、靴

おとなりの屋根に落ちてる枯れた菊　みさを
古い家屋根の瓦がころげさう　ふさ江
べッ甲屋きれいな櫛が並んでる　同
マラソンを途中で止めた青年團　利明
マラソンにもう少しださくやしがり　重勝
マラソンにふゝへる足をふみしめて　同
れ言まで靴を買つてと言つてゐる　春江
けまりてボールがとばずくつがぶび　重勝
弟のくつはいつでも泥だらけ　みさを

席題　朝寢、窓、ポスト、帶

朝寢ぼうめしも食はづにうちを出る　ふさ江
朝寢して窓を開けると日が笑ひ　同
窓際にいれむりしてるおばあさん　同
天窓のガラスはいつもくもつてる　重勝
夏の夜窓にすはつてふゐをふく　利明
窓にそう廊下に立つてる人の影　みさを
日曜日窓の下から誰かよび　ふさ江
道をとう人にさゝれる赤ポスト　重勝
お正月きんしやの帶をしめてゐる　同
小さい子服の上から帶をしめ　はる江
とうざい屋なんだか變な帶をしめ　重勝
博多帶キュ〳〵ッとなるのが面白い　ふさ江
たかしま屋おびが安いと書いて居る　利春

席題　人形、小猫、日曜日

小さい子人形だいてれむつてる　みさを
人形のはなをれづみがくひちぎり　ふさ江
人形の頭のかんざしさびてゐる　同
正成が敵をなやますわら人形　重勝
人形の指が一本かけてゐる　ふさ江
人形に話をしてる女の子　みさを
人形の着物は絹のものばかり　ふさ江
だいてる子より大きいお人形　みさを
小猫でもおひげ生してゐばつてる　みさを
ひざの上小猫はじつと目を細め　ふさ江
日曜日窓の下からひがあたり　よし子
日曜日電氣がつくまで遊んで來　ふさ江

紅椿小集會（京都）

於天通路宅　清水光風報

席題　疊　天通路選

はじめての句會疊を見てるだけ　遙湖
逢筆の少し疊へ字が餘り　狂夢
貧しさは疊の冷えも知つてをり　柳水
潔癖家疊の埃に草臥れる　哉三郎
上敷をそつとめくれば古疊　興志雄
床の間の梅がこぼれるさら疊　光風
こうしてはおれぬ疊へ陽が當り　吐露利
疊屋へ埃の多い陽が當り　同
轉寢の起きて疊のあとを撫で　紫水
(人)待つ宵は雨に疊の目をかぞへ　光風
(地)儲からぬ仕事疊屋外へ積み　吐露利
(天)ひぢだこが出來て疊屋年が明き　狂夢

席題　醉ざめ　光風選

醉ざめのゴク〳〵動くのど佛　紫水
醉ざめの水に仲居の長返事　遙湖
醉ざめの時計落した事を知り　狂夢
醉ざめてからの財布をさびしがり　興志雄
醉ざめにあしたのパンを考へる　天通路

醉ざめの眼に宵の月おぼろ　柳水
醉ざめの目にいぢらしい子の姿　同
(人)醉ざめの我家でないと氣がつい　狂夢
(地)醉ざめの瞳にコップ躍つてる　紫水
(天)醉ざめの水へ女の顏が浮き　與志雄
(軸)醉ざめは地球の動くのを感じ　光風

豆秋居偶會（大阪）

一月十八日夜　須崎豆秋報

題　煙、足袋　互選

どうもて合はず足袋屋へ替へに行き　鋭峯
右の足穿いてつゞくり待つてゐる　裸人
地下足袋の臭ひ焚火は燃えつくし　斗入
鮮人の小屋は四方へ煙吐き　同
下女の足袋かゞとが口を開けて居り　柳精
子の足袋は甲から上へさすり上げ　同
ペッチン穿いてほろ〳〵と戀　豆秋
信玄袋からヤトナ足袋を出し　同
吸殼の煙に猫は横を向き　同
もう女寢る氣か足袋を脫ぎ初め　公二
板敷の汚れに氣付く新の足袋　同
寢苦しいまゝに煙草の輪を見つめ　同
火元の噂をよそに立つけむり　同

公二對座吟（大阪）

二月四日　丸山公二報

毛を分ける鏡女は笑つてゐ　公二
駈けつけた人へ車掌はドアを閉め　同
掛取を歸してラヂオ聞いてゐる　同
つゝましい客へ火鉢の炭がはぜ　雨町
折からのラヂオに話ふとぎれ　同
自轉車の若氣は坂をのぼりつめ　同

名賀壽會例會（尼崎）

一月廿六日　於大物町圓平寺今村吉朗報

席題　ラクビー　互選

峠からラクビー戰へ時雨れて來　墨水
タックルをされてもボールまだ抱へ　斧葉
後半は勝たればならぬ靴の紐　双光

席題　鐵　東北選

緊縮に鐵骨のまゝ錆びてゐる　雞牛子
(佳)鐵工所硝子が割れたまゝ春　苦香瀧
(佳)れぎ畑鐵柱だけの冬となり　四方路
(佳)鐵棒に眼鏡が落ちただけの藝　蟹江柳堂
(人)鐵材がたしかに有つた土の色　桃源
(地)鐵橋へ儲ける話少し焦れ　四方路
(天)鐵叩く音に社宅は住み馴れる　双光

席題　聲　陽喜亭選

囃されて逃げる給仕の聲變り　柳堂
(佳)立ち聞きの小聲になつて氣がいら　吉朗
(佳)いゝ聲へ盃なんぼでもさゝれ　梅風
(佳)聲のする方へ按摩の悲しい眼　雞牛子
(人)樂屋風呂舞臺と異ふ聲で居る　双光
(地)聞き馴れぬ聲に臺所から上り　苦香瀧
(天)仰山な聲で舞妓の拳は負け　亮山
(軸)緣日を拔け鼻聲の子を叱り　陽喜亭

席題　依　賴　雞牛子選

痩腕を信ずる妻のありがたく　盧白
眞つ直ぐに去ぬのが析を賴まれる　突支坊
依賴狀返事の筆へ思案する　斧葉
(佳)依賴狀子は命令の樣に書き　吉朗
(佳)依賴書へ水晶の判と白い指　梅風
(佳)土產物依賴をされた富へ愚知　陽喜亭
(佳)タイピスト書をほころび賴まれる　双光
(佳)不足稅拂はせられた依賴狀　墨水
(人)儲けではない辯護士の依賴され　陽喜亭
(地)依賴狀涙のあとが見えるなり　茶坊
(天)依賴した揮毫忘れた頃に來る　柳堂

席題　竹　獨　樂　溪花坊選

說明も入らず竹獨樂賣れて行き　吉朗
竹獨樂の方へ乞食が這つてくる　雞牛子
新らしい壘へ竹獨樂叱られる　亮山
强い子が來て竹獨樂は二度借られ　四方路
竹獨樂のない子が一人壁により　苦香瀧
(佳)怖りられて居る竹獨樂の音がい　四方路
(佳)竹獨樂はうなり乍らに黃昏ろ　茶坊
(佳)竹獨樂の方へとんどの煙がゆき　苦香瀧
(佳)竹獨樂は寺の空氣をひきしめて　茶坊
(佳)竹獨樂の渦生土をはれ返し　墨水
(人)竹獨樂を土俗玩具の中に見る　雞牛子
(地)竹獨樂へ低ふ飛んで來る　柳三
(天)竹獨樂は青味を帶びて渦を卷き　墨水
(軸)竹獨樂へ洗練された子の手つき　溪花坊

兼題　寢正月　四方路選

寢正月やつぱり女房よく動き　双光
寢正月嫁も憂える花合せ　東北
寢正月やつぱり春を意識する　雞牛子
(佳)奴なら通せと起きる寢正月　突支坊
(佳)郊外へ住んで呑氣な寢正月　吉朗
(佳)双六へ割込んで來る寢正月　双光
(軸)寢正月下女恐れ入ることば　四方路

兼題　開　店　盧白選

(人)開店に郵便念を押して入れて　蟹江柳堂
(地)開店を待つデパートに的があり　桃源
(天)逃げもせぬ客へ慌てる開店日　亮山
(軸)今日からと云ふ行商に草臥れる　盧白

編輯後記

路郎生

▽近ごろは莫迦々々しくあたゝかい日が續く。今日も實にあたゝかい。書齋のベランダで葭乃とリリが、「あたゝかいはれ」と云つてのんびりとした春光に浸つてゐる。僕もすぐその横で椅子に深く腰を下ろし、足を机の上にあげて「一里位のさきから菜種の匂ひがして來さうだね」とこれに應じる。それほどうららかな明るい感じだ。こんな空氣のもとに編輯後記を書く。

▽二月號の評判はなか〳〵よかつた。僕の方だけでなく、一體によく出來てゐたやうだ。二月は多少だらけるものだが「氷原」「ふあうすと」「川柳人」「番傘」「きやり」何れもそんな氣味のなかつたのはうれしい。中で「川柳三味」がひとり冷刀の追悼號だつたのは淋しかつた。

▽本號も原稿が相當に集つた。ビルディング其他の原稿で頁數に制限されたため次號廻しになつたものが少なくない。僕の「廿四篇まで」も頁數の關係からこれまた休載することにした。

▽前田雀郎氏が次號へ何か書かれることになつてゐるので大いに期待してゐる。

▽一月二月に亘つて社關係の人々に多少の異同があつた。働く人のために道をひらく方法でもあるので止むを得ないことだと思ふ。この意味から新人の出現をのぞんでゐる。

▽昨年二月紀元節の佳日をトして創立された松山支部の一周年記念句會が三月十六日に道後の溫泉樓で開かれることになつた本社からは、ひろし君等が出かけることになつてゐる。私の出欠は仕事の關係上月末にならぬと決定することが出來ない狀勢にある。

▽年越の日にあびこへ參詣した往路は開業以來始めての阪和で行つて見た。大變な人出で電車に乘るまでに一ト苦勞、女や子供は悲鳴をあげてゐる。すしがへしやげられたやうになつて我孫子前へ下ろされた。南海で來るよりも餘程近くまでもつて來てくれるので南海の獨占であつたあびこ詣のお客の半ば以上は阪和のものとなつた。勢ひ兩社の競爭の激烈なこと、南海と阪和の客が合流するところでは兩社の社員五六名宛が差向ひになつてメガホンで「エヽ毎度有難うございます、お歸りは是非阪和を御利用願ひます」と絶叫しつゞける。「毎度有難うなんて始めてやないか」と客の方でもひやかしてゐる。南海でも負けず劣らず相手の聲を消すべく努力してゐる。こゝもと南海は守勢である。が資本の力は廣告幟や廣告塔で壓倒してゐる。「お歸りは住吉へ御參詣が出來ます」と南海では住吉神社の途中下車を本年から開始して應戰につとめてゐた。

私の神籤は第五凶であつた。「家道未能昌。危危保禍殃。暗雲侵月桂。隹人一炷香」なるほどと思つた。歸路は南海で戻つた。一昨年の年越の日に我孫子から戻つたら東京から三太郎君が來てゐて萬よし君等と呑みはじめてゐるところだつたが今年は誰も來てゐなかつた。

▽同人藤里好古君が「粗敉攷」といふ小型本を刊行した。岩おこしのことを研究してある。實に根氣のよいところを見せてゐる附錄として「狂歌、狂詩、川柳に詠ぜられたる粗敉」といふものまで發表してゐる。好事家には是非一本をお薦めしたい。定價金五拾錢、發行所は大阪市北區南森町五拾四番地、星馨文庫である。

▽一ト月足らず會はない革郎君から親展書が届いた。ハハア、又首の話かな。それとも俺のことを心配して何んか又持ち込んで來たのかなアと思ひながら開封して見ると「長らく御無沙汰一年も會はない樣な氣がする御近狀如何小生一家病氣の巢なり病氣ぜぬのは父と弟だけ昨年十月以來約四ヶ月間八尾と雲雀ヶ丘で御醫者と藥屋の御厄介になり通しまアこれでどうやら病氣も種切れらしいから御安心下さい

近作左に

あきらめを朝のお膳の前に吐き
病む耳の中に響くは鞭の音
まだ笑ふ餘裕があつて生きてゐる
恩愛のきづながつしり喰らひつ

咲く花も冬と春とで此のちがひ
ロンチヤンの命日が近づいて來
ましたれ、第二世ロンドン君の
一歩さん此頃は如何です今度は
病氣で選擧は一切御無沙汰、風
見章も代議士になりましたね、
あれでも新人ですよ、前田房之
助、中馬興丸まアあんなのが無
難なんでせう。庄君應援の田萬
清臣美事に落選、安部、鈴木、
龜井の連中は兎に角河上と堺は
一度出してやりたかつたです。
さうすりや口先の英雄は何も出
來ないと云ふことがよく分るの
だのにと殘念に思ひます、片岡
元田、山本枕を列べての討死は
痛快、無帝黨天下がさう容易に
來るものぢやないが我々の眼の
黑い間には來ますれ、二十年位
は生きてゐたいものですね。
矢張り球を突いて居られますか
小生は此頃小人閑居して屁ばか
りひつてゐます病氣で酒が呑め
ないのが淋しいのですそのうち
伺ひますお爺ちやんや奥樣によ
ろしく」とある。別に親展らし
いところもない。風見章は僕に
も感激の深い男だ。がつしりし
た親切な男だつたが、ある意
氣張で僕と毆り合はんばかりの
一刹那、革郎君が仲に狹まつて
毆合はずにすんだ思ひ出がある
三人机を並べて仕事をしてゐた
ことがあるだけに風見章の當選
は僕にも愉快だつた。
▽正月の句會に來た道田葉平君
近く子が生れるといふので大變
な騷き方、生れぬ先からこども
の名が氣にかかり、その命名を
僕に依頼されたが、さう急にい
ゝ名が出來ぬのでよきインスピ
レーションの來るを日夜待つ
てゐると、親類や友達が早く名
を知らせよこのいふので濟まな
いが男の名と女の名と二つ知ら
して欲しいと矢の催促、そこで
男の子の名を笑居、女の子の名
を不二と命名したのが一月の中
旬の話。ところが一月晦日にな
つてやう〳〵一女を擧げた。
「只今(八時半)不二出現仕候
俺の子だ指も確に五本ある
子の寢顏をつと覗ば生きてゐる
身長五六・二ミリメートル体量
四・〇八〇キログラム
右取敢ず御報迄」
と云ふ頼り。嬉しさが一片の葉
書に踊つてゐる。沒になつた男
の子の名の笑居はセウキヨと讀
む、難しいやうだがこどもの愛
稱としてはセウチヤンでもセウ
キヨチヤンでも不自然な呼び名
ではない。字の意義は笑つて居
るんだから僕のうちの一歩のや
うに矢張り圓滿さをもつてゐる
これを考へついたのはルソオの
エミイルから來てゐるのだ。エ
ミイルの如くあれといふに外な
らぬ。不二は無二だ、二なき者
だ。英語のナナは可愛ゆき者よ
といふ意味だが、それにひつて
きするものだ。健かならんこと
をのぞむ。
▽編輯局のお願。原稿紙は二十
字詰のことといふ規定があるの
に、編輯局最近の調査によれば
寄稿された原稿紙の字詰は二十
八字詰、二十五字詰、二十四字
詰、二十字詰、十八字詰、十五
字詰、十四字詰の七種が入亂れ
これに字詰を無視した原稿さへ
加はつてゐるので字數計算の能
率上非常に影響甚大とありますから、是非々々二十字詰にお願ひしたい。
▽せちがらくなるといやなことをよく聞かされる。これもその一つである。近ごろ阪神川柳家の家庭を歴訪して金品をねだつて歩く男があらはれた。夫が單なる物貰ひであれば問題ではないが岡山や神戸や大阪の川柳家の名を利用してやつて來るので利用された方も、來られた方もお互に迷惑に感じてゐる。御注意までにお知らせすることにする携へて來る書面で見ると長崎市新大工町二七川上看花或は川上雨樓と名乘つてゐるが、その外の名もあるらしい。私の宅へは去年來たがさうした人間以外私の宅へは主義者やプロ雜誌の連中で無心を云ひに來る人もあるので多分私の方へだけ來たのだらうと思つてみんなにそのことは話さなかつたが、あまり迷惑をする人が多いさうだから書かざるを得ないことになつた。某君が長崎の川柳家にそんな人があるかと問合はせたところ、長崎にはそんな川柳家はゐないといふ回答があつたさうだ。非常にあはれな手紙を持つて來るさうだがそのわりにニコ〳〵した四十位の男ださうだ。本人の手紙によると老土工とある。
▽二月は二十八日しかない。それが何かにつけて祟る。公私共にすべての仕事が月末へ押しつめられた形だ。二月が二十八日しかないといふことは始から判つてゐることだが、そこが人間の面白いところでもある。四月號はその心配もなからう。

投稿規定

▼近作柳樽及課題吟の句稿は葉書又は同型の厚紙に各題別紙に認め、住所氏名雅號を明記すること。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記すること。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認めること

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第七卷第五號課題

三月五日締切

（各題十句以内）

▼水　大島濤明選

▼扳足　松盛琴人選

▼保護　水谷鮎美　森石竹共選

第七卷第六號課題

四月五日締切

（各題十句以内）

▼耳　森東魚選

▼手　中野柳陽選

▼柱　伊藤絲之助　安西杏三共選

毎號募集

▼近作柳樽（拾句迄）麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價定

普通號　一部　金參拾錢
新春特輯號　一部　金五拾錢
八月特輯號　一部　金四拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます　▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも貰ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和五年二月廿五日印刷　第七卷第三號

昭和五年三月一日發行　（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社　振替口座大阪三一五一四番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

電話天王寺一一六七番

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

賣捌書店

（大阪）大賣捌　サクラヤ書房。（明文堂　其他市内各書店）

（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（函館）

石巻（石川縣小松）マコト屋　（京都）三宅　（松山）弘文舍

川柳雑誌社關係の人々（順はろ〳〵）

賛助員

池澤樂居　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　田中辰二　納純　嘉　長國藤　崎枝村　柳史作　秀郎　小出榴重　前田雀郎　田中清　吉　安川久流美　窪田銀波樓　川村花菱　岡鳥平　川上三太郎

社友

伊藤彦造　西原柳雨　大島濤明　末弘嚴太郎　藤本卯之助　赤井清司　篠原春雨　柴谷柴舟　木村半文錢　森東魚　椙元紋太　生田翠夢　池田雪峰　岡田三面子　蛭子省二　中見光路　中澤濁水　中野柳陽　中川めかく子　永田里十九　辻左馬　谷村稔　井たけし　友淵貴山　土井文蝶　西村市公　牧田普門　須崎豆秋　淺井冷々子　朝田新水　北山悟郎　水谷鮎美　庄萬よし　丸山公二　近藤テルホ　熊本黄蛾　柳川洲馬　伊藤愚陀　岩崎柳路　岩本素人　松村敏郎　白井梅里　藤里好古主　松田多郎　清水光風　越村加香　麻生路郎

同人

伊藤緑之助　桑原京郎　植田湖舟　上田柳影　水田桐郎　三輪五輪　木山青砂郎　櫻井圓角　竹内多聞　高橋かほる　阿部閑生　阿形一杉　安西杏三　中島鐵洲　出口雨町　麻生葭乃　住田亂耿　太田朝陽　小川三猿堂　長谷川一徹　原史風　亀井花童子　松丘町二　松盛琴人　石川双葉子

編輯局（同人）

橋本緑雨

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
天滿支部（大阪市）幹事北山　悟郎
濱寺支部（大阪府）幹事太田　朝陽
神戸支部（神戸市）幹事西村　市公
山口支部（山口縣）幹事柳川　洲馬
函館支部（函館市）幹事亀井　花童子
小松支部（石川縣）幹事本田　柳一路
高知支部（高知市）幹事中澤　濁水
梅田支部（大阪市）幹事水谷　鮎美
盤ケ池支部（大阪府）幹事植田　湖舟
金澤支部（金澤市）幹事中川めかく子
糸屋町支部（大阪市）幹事近藤テルホ
田邊支部（和歌山）幹事辻　左馬
篠川支部（島根縣）幹事伊藤　緑之助
豊橋支部（愛知縣）幹事白井　梅里
平塚支部（神奈川）幹事酒井　駒人
加古川支部（兵庫縣）幹事水田　桐郎
京都支部（京都市）幹事桑原　京郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島　鐵洲
北濱支部（大阪市）幹事谷村　稔
別府支部（別府市）幹事小川　三猿堂
堺支部（堺市）幹事友淵　貴山
松山支部（松山市）幹事岩本　素人
守口支部（大阪府）幹事朝田　新水
御旅支部（大阪市）幹事櫻井　圓角
高岡支部（富山縣）幹事越田　久水
天王寺支部（大阪市）幹事須崎　豆秋
平野支部（大阪市）幹事熊本　黄蛾

古本屋時代

今のやうにあさから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に

公立社の棚

には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。

（路郎生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二一番

清酒

午後六時 白鶴が待ち 妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて來る

攝津灘

嘉納合名會社釀

麻生路郎氏著・川柳漫談

吉岡鳥平氏挿繪
柴谷柴舟氏挿繪

四六版・三九一頁
美裝函入・挿繪六十葉

定價金壹圓五拾錢
送料金拾貳錢

本書の内容 ▼川柳漫談（臍の緒、盲人の徽章、蛙、夫婦喧嘩の解剖、都會地獄、君も僕も死ぬ話、レディーメードの書置、戀を追ふ一人者、指切、鼠、盜人、女の三十、賽錢、重役、フアブルの糞の外交、幽靈の靴、近眼の微苦笑、傘の行衛、猫の寫眞、愛の巢、保險屋と新聞屋、贋趣味、床下の佛像、無口附貸の犬、鼻の修業、なりさがり魂、校長さんと煙草、私の墓）▼川柳染ちがひ▼一ト昔前の大阪見物

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳漫畫 累卵の遊び

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入 定價一圓（送料拾錢）

内容概目

川柳漫畫 累卵の遊び
日月は輝く
大衆と共に

著者のサイン御希望の方はその旨附記して御注文ありたし

賣捌所 不朽洞
大阪市西成區千本通の五七番
振替大阪 五二五八五番

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和五年二月廿五日印刷納本 昭和五年三月一日發行

川柳雜誌 （第七十四號） 定價金三拾錢